

貝塚市埋蔵文化財調査報告 第31集

# 窪田遺跡、窪田廃寺発掘調査概要

1995.3.31

貝塚市教育委員会

# 序 文

昨年9月4日、関西新空港に一番機が飛びました。関西に、それも地元泉州に、世界と結ぶ空港ができたことは、新たな泉州の発展に大いなる触発剤となることでしょう。貝塚市もこの新空港と共に大きに発展することは間違いありません。

時代の大きい発展は、新たな開発行為を生みます。家を建て、道をつくり、人が快適に生活でき、今よりも更によりよい生活をするには、現代社会の大きな課題です。市民の皆様が国や地方自治体に望む事は、よりよい快適な生活、安心した生活ができるように条件整備をすることと本市では、認識しております。国や自治体が、国民の皆様が生活がしやすいように、便利のように道をつくり、下水道を完備し、環境を整えるのは何よりも重要な課題なのです。この住みよい環境づくりは、単に公共機関だけではなく、今回のようなマンション建設に代表される民間の方々のご協力も、ぜひとも必要な事なのです。快適な住みよい空間づくりをする、街づくりをするのは、官民一体となって推し進める重要な目標です。

これら開発行為に伴い、古来よりの遺産である地中に埋もれた埋蔵文化財の調査が必要になってきます。本市では、教育委員会社会教育課に専門技師を配置し、これら開発行為に伴う遺跡の調査に備えています。また、調査された遺跡を広く市民の皆様にご公開して、図書館の2階に遺構・遺物の開設コーナーも設置しています。地元貝塚市の先人の歩みを埋蔵文化財の考古資料により復元し、古来よりの人の知恵と苦勞をしのぶ素材にして、歴史知識を豊かにしていただけたらと考えております。

今回、当教育委員会が実施しました窪田遺跡（窪田廃寺遺跡）は、古くから平安時代の瓦が出土することで有名な遺跡でした。調査の結果、飛鳥時代の溝や鎌倉時代の集落跡などが見つかるとともに、また、鎌倉時代の掘立柱建物の柱痕からは、和歌山県との交流を示す遺物も出土し、郷土の古代史を語る上でなくてはならない視点を与えることができました。

調査の成果を報告書として刊行し、報告致します。

本調査を実施するにあたり、富士住宅建設株式会社、大阪府教育委員会、地元関係者の方々に、支援、ご援助をいただいたことに深く感謝いたします。

今後も、当教育委員会の調査事業にご支援、ご協力をお願いします。

平成7年1月31日

教育長 福井 昱彦

# 例 言

- 1、本書は、富士住宅株式会社マンション建設に伴い実施された貝塚市窪田に所在する、窪田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2、調査は、富士住宅株式会社の委託をうけ、貝塚市教育委員会が実施した。発掘調査は平成6年6月より7月まで、整理作業は平成7年1月まで実施した。
- 3、発掘調査及び報告書作成は、貝塚市文化財保護審議委員坪之内徹が担当し、日本考古学協会員渋谷高秀が協力した。第1章～第3章を渋谷が、第4章は坪之内が担当した。
- 4、調査の実施にあたっては、井藤徹・瀬川健・山本彰（大阪府教育委員会）、南川孝司（摂泉河文化資料）、森村健一・小谷正樹（堺市教育委員会）の各氏の指導・助言を受けた。記して感謝する。
- 5、遺物図版番号は、本文実測図版番号と一致する。

# 本文目次

序文

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の方法と経過	
第2章 位置と環境	3
第3章 遺跡	6
第1節 調査概要	6
第2節 基本層序	6
第3節 遺構と遺物	6
1、飛鳥時代	6
溝1	
2、平安時代中期	11
凹地1	
3、鎌倉時代	13
掘立柱建物1	
柱穴群	
井戸	
4、江戸時代～近世	20
粘土取り土坑1～5	
池1・2	
鋤溝	
暗渠排水	
5、包含層出土遺物	25
第4章 まとめ	26

# 插图目次

- 第1图 調査風景
  - 第2-1图 近木庄復元图
  - 第2-2图 貝塚市周辺地質图
- 第2图 貝塚市遺跡分布图
- 第3图 調査区位置图
- 第4图 地区割り模式图
- 第5图 遺跡全体图
- 第6图 溝1平面图、断面图
- 第7图 溝1、土坑1遺物実測图
- 第8图 掘立柱建物平面・断面图
- 第9图 柱穴1遺物出土状態平面・断面图
- 第10图 南区柱穴群平面图
- 第11图 柱穴22平面・断面图
- 第12图 井戸1平面・断面图
- 第13图 土坑2平面・断面图
- 第14图 中世遺物実測图池1、2平面、断面图
- 第15图 粘土採り土坑平面、断面图包含層、近世遺物実測图遺物
- 第16图 池1、2平面・土層图

# 图版目次

- |              |                 |
|--------------|-----------------|
| 图版1 航空写真     | 图版9 遺跡 近世遺構     |
| 图版2 遺跡 全景    | 图版10 遺跡 近世遺構    |
| 图版3 遺跡 全景    | 图版11 遺跡 近世～近代遺構 |
| 图版4 遺跡 全景    | 图版12 遺跡 土層断面    |
| 图版5 遺跡 飛鳥時代溝 | 图版13 遺物         |
| 图版6 遺跡 飛鳥時代溝 | 图版14 遺物         |
| 图版7 遺跡 中世遺構  | 图版15 遺物         |
| 图版8 遺跡 中世遺構  | 图版16 遺物         |

# 第1章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

フジ住宅株式会社は、貝塚市窪田126-1にマンション建設をすることになった。この地は、「大阪府埋蔵文化財包含地所在地図」に記載された窪田遺跡・窪田廃寺跡に該当するため、貝塚市教育委員会では、平成6年3月にマンション建設部分、二ヶ所にトレンチを設定し試掘調査を実施した。試掘調査の結果、中世の包含層や遺構・遺物を検出したため、フジ住宅株式会社と貝塚市教育委員会で協議のうえ、マンション建設部分に関して貝塚市教育委員会で本調査を実施する事となった。

## 第2節 調査の方法と経過

調査前の地目は、工場・畑・水田である（第3図）。マンション建設に伴う調査面積は3246㎡である。発掘調査は、平成6年6月から実施した。

地区割り測量及び航空測量は、国際航業株式会社に委託し実施した。5mを基本単位として、国土座標XY軸に打ち込み、遺物取り上げの最小単位とすると共に、遺構実測の軸とした（第4図）。地区名A0は、調査区の遺構の拡張等も視野に含めて、X-174.15m Y-59.53m地点にした。

各調査区には、便宜上西区・南区・東区・北区・中区の名称を与えた（第4・5図）。

良好な中世包含層・遺構が存在するとの試掘調査の成果に基づき、現代盛土層は機械掘削、包含層は人力掘削で実施するとの予定で、工場の基礎コンクリートの撤去作業に合わせて、西区-南区-東区-北区-中区の順序で機械掘削を実施した。

現代盛土を除去すると、南区や東区では、工場を建設するために安定した地盤まで掘削されており、また繊維センターのための機械据え付けに伴う「床打ち」といわれる地表下30cm程度、工場内全面を掘削している事が判明した。それ故、中世包含層のみでなく、中世遺構が存在すると想定されていた地山の黄灰色シルト層までも既に除去されている箇所があることも判明した。しかし、部分的であるが、残存状態の良好な包含層・遺構が存在していた。調査区外に伸びる遺構に関しては、フジ住宅株式会社と貝塚市教育委員会で協議し、拡張して調査した。

西区は、現代盛土が非常に浅く、10~20cm程度で地山面に到達した。遺構は、調査区の

北では池状遺構、中央部では調査区と同方向で鎌倉時代の掘立柱建物を、南部では掘り方が30cm程度の大規模な掘立柱建物の柱穴や井戸を検出した。掘立柱建物の規模を確認するため、中央部では柱穴が確認された四列で、幅80cmで西に調査区を拡張したが、既に調査区の1mより西に向かっては、工場建設の際の破壊がなされていた。また、南部の柱穴の東に調査区を拡張したが、この部分も同様であった。半分検出された井戸は、南側に調査区を拡張し調査した。

南区は現状は工場の駐車場で破壊が少なく、包含層や遺構が良好な状態で残っていると想定されたが、1m前後の盛土を除去すると、堅い岩盤層まで既に工場建設の際に掘削されており、部分的に「小山」状に地山が残存する状態であり、調査区全面が破壊されていた。一部東区にも破壊は及んでいた。破壊はバックホーによるもので、機械の爪跡が残っており（第5図、図版3・4・11）、その状況から、南区は西から東方向に、東区は南から北方向に、包含層や地山を掘削したと考えられる。

東区では中央部では二面の遺構検出を実施し、上面では工場建設前の暗渠排水（図版11）を確認した。東区の北半分は、大きく工場建設のための基礎杭で攪乱されていた。しかし、部分的ではあるが攪乱されていない地点では、良好な中世包含層が残っており、7世紀前半の溝（第5・6図、図版6・7）を検出した。この溝に関しては、溝部分にそって東西に拡張し調査した。

北区は、現状は畑であり、調査前までハウス栽培をしており、他の調査区のように工場建設の為に破壊を受けず、良好な包含層や遺構が存在していると想定できたため、マンション建設の浄化水槽部分だけの

調査区以外に拡張し調査した。調査の結果、現代の耕耘機の跡（図版11）を検出し更に粘土取り土坑（第13図・図版10）を検出した。拡張した面積は、670㎡で、最終的な調査面積は3916㎡であった。

遺構全面の測量は、7月15日航空測量を実施し、27日現地の全調査を終了した。



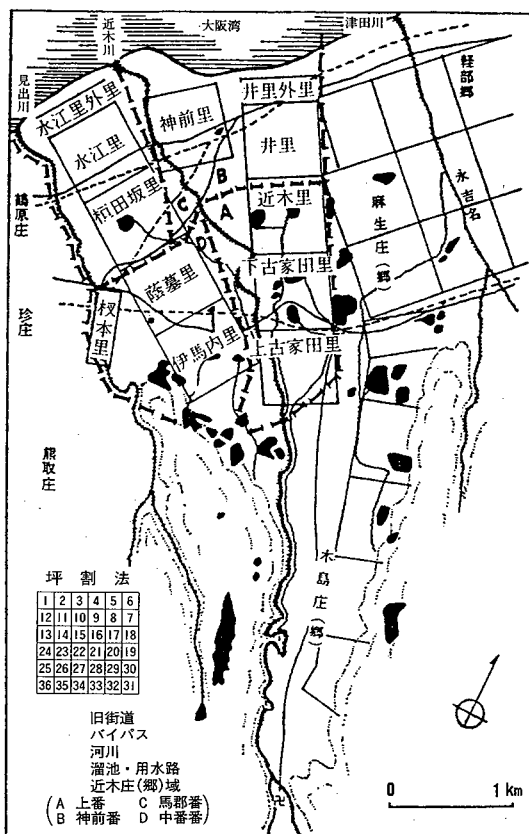
第1図 調査風景

## 第2章 位置と環境

窪田遺跡・窪田廃寺は、貝塚市窪田、南海本線二色の浜駅北東方に位置し、南北約700東西約200mの広がりを持つ遺跡である。西に近接して中世の掘立柱建物が検出された澱池遺跡が存在する。

調査地は、標高14～15m前後の見出川と近木川に挟まれたほぼ中央部の中位段丘に位置する。調査地の周辺部の標高は、南東部が高く、緩やかに西に傾斜し、また近木川にむかって北方向に、約1km北から極端に低く、9m代の標高になっている。

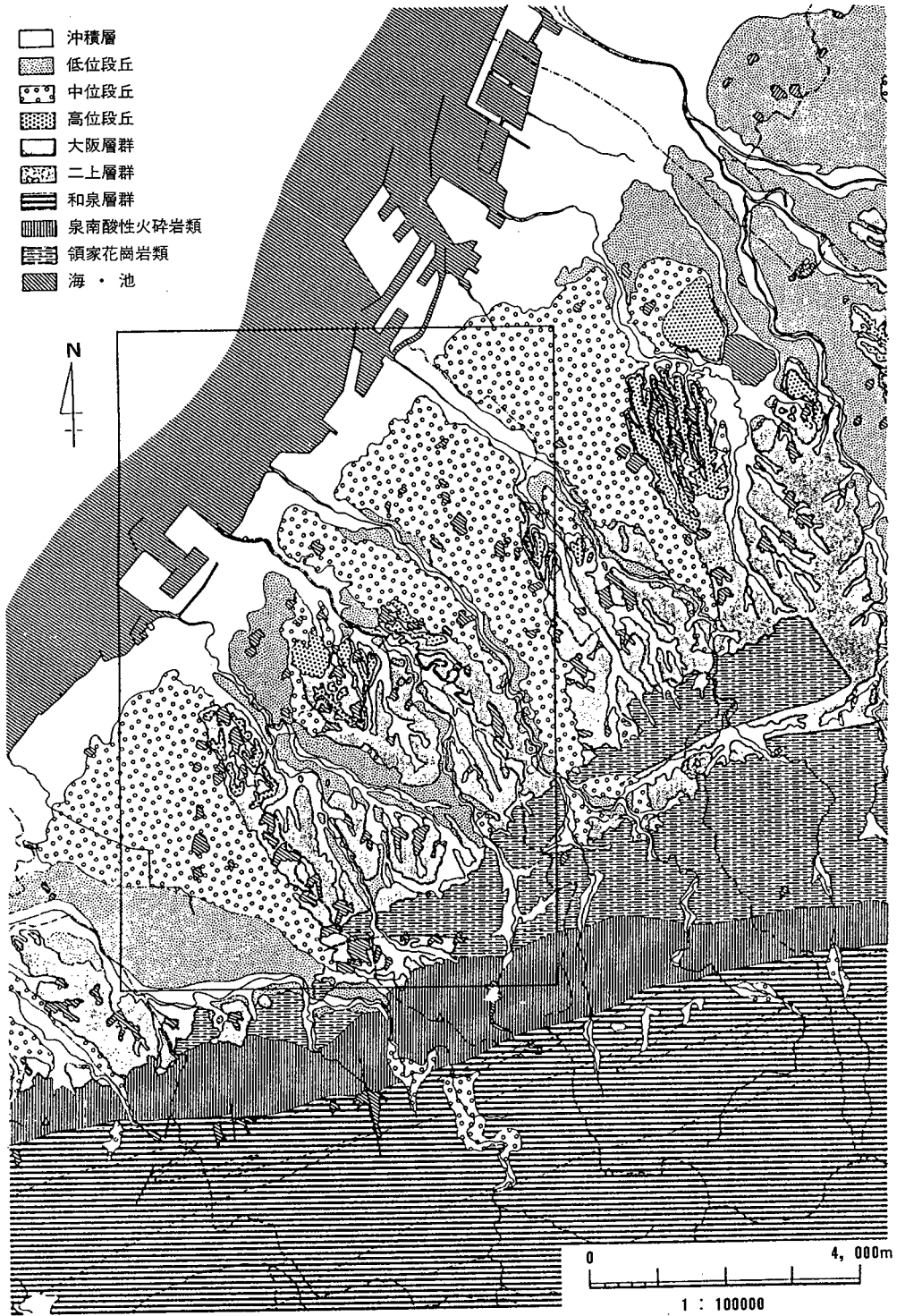
貝塚市で旧石器時代の石器が出土したのは、王子遺跡、海岸山遺跡、新井遺跡などがある。縄文時代は、泉州で唯一である早期の押し型文が出土した畠中遺跡が存在する。国家概念や支配-非支的の概念を持つ弥生人が到来したことにより始まった弥生時代の遺跡は、津田川と近木川の間、畠中、石才、清見など、また近木川と見出川の間、沢新田、沢、窪田遺跡など存在する。古墳時代には前期末から中期の築造と考えられる全長72mの貝塚市唯一の前方後円墳である丸山古墳が存在する。近接して二基の古墳が検出されている。集落遺跡は、畠中で竪穴住居址が検出されている。飛鳥時代には現在の海岸線から一定の距離をもって近木川右岸に加治、神前、畠中、津田川右岸に掘、近木川と見出川の間、窪田遺跡などが出現する。これら遺跡に顕著なのは、蛸壺形土器の出土である。中世以降、加治、神前、畠中遺跡など数多くの遺跡群が出現する。



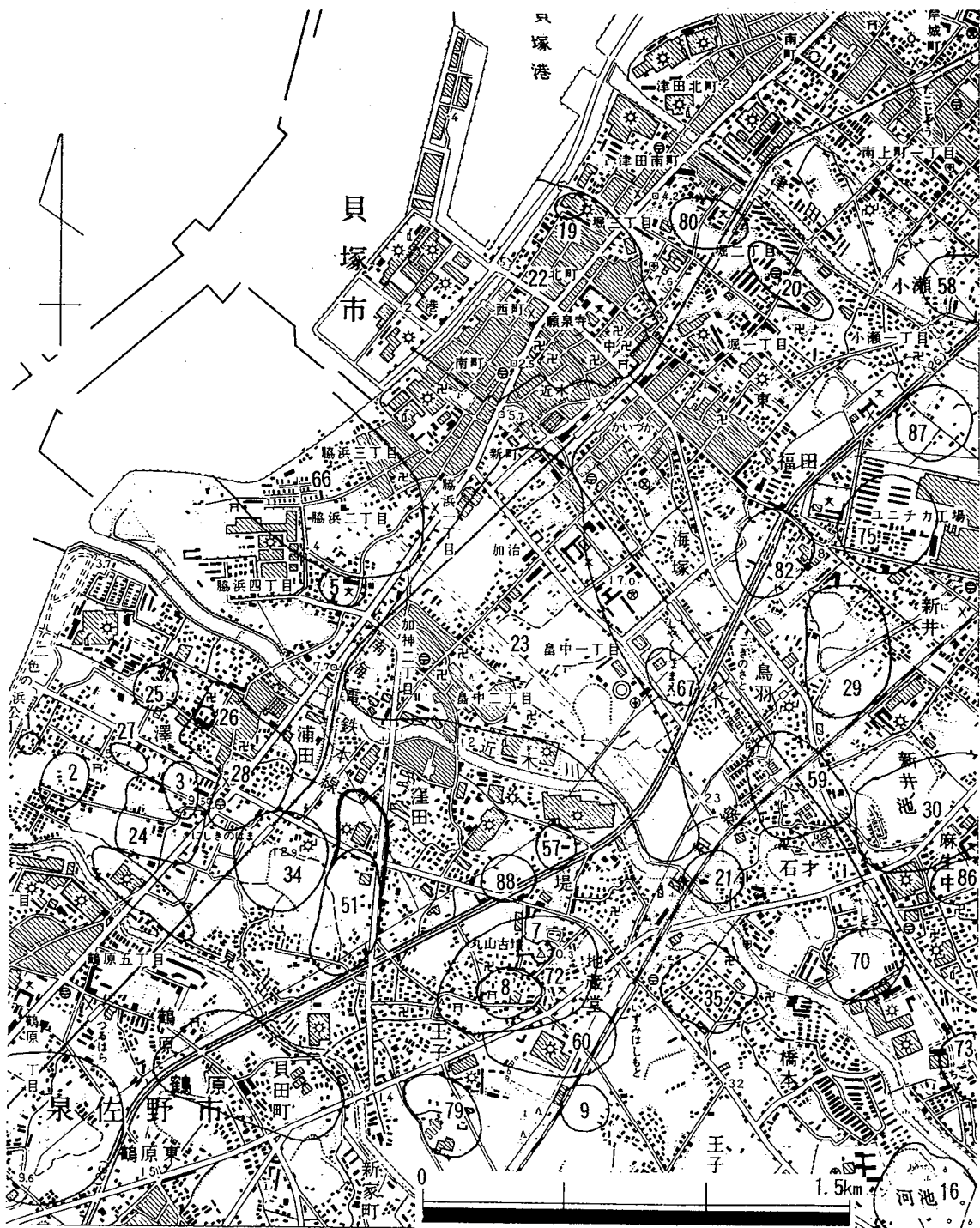
第2-1図 近木庄復元図 「脇浜遺跡」

(財大阪府埋蔵文化財協会(1986)より転載)





第2-3図 貝塚市周辺地質図  
「脇浜遺跡」(財大阪府埋蔵文化財協会(1986)より転載(一部改変))



1. 沢新出遺跡 2. 沢海岸遺跡 3. 沢遺跡 5. 長楽寺跡 7. 丸山古墳 8. 地藏堂廃寺 9. 下新出遺跡  
 16. 河池遺跡 19. 泉州麻生塩壺出土地 20. 堀遺跡 21. 橋本遺跡 22. 貝塚寺内町遺跡  
 23. 加治神前畠中遺跡 24. 明楽寺跡 25. 沢共同墓地遺跡 26. 沢西出遺跡 27. 沢海岸北遺跡  
 28. 沢城跡 29. 新井鳥羽遺跡 30. 新井ノ池遺跡 34. 澱池遺跡 35. 積善寺遺跡 51. 窪田遺跡  
 57. 堤遺跡 58. 小瀬五所山遺跡 59. 石才遺跡 60. 王子遺跡 66. 脇浜遺跡 67. 今池遺跡 70. 石才南遺跡  
 72. 地藏堂遺跡 73. 名越西遺跡 75. 新井鳥羽北遺跡 78. 沢西遺跡 79. 王子西遺跡  
 80. 津田遺跡 82. 福田遺跡 86. 麻生中出口遺跡 87. 小瀬遺跡 88. 堤三宅遺跡

第 2 - 3 貝塚市遺跡分布図

# 第3章 遺 跡

## 第1節 調査概要

窪田遺跡・窪田廃寺は、標高14～15m前後の見出川と近木川に挟まれた中位段丘に位置する。検出遺構の時期・種類は、6世紀末から7世紀初頭の溝、13世紀前半の掘立柱建物・土坑、14世紀前半の井戸、近世から近代にかけての池・粘土取り土坑・鋤溝・暗渠排水柱穴群と多様である。遺構に伴わない遺物は、8世紀、10世紀、15～20世紀がある。遺物の豊富な時期は、6世紀末～7世紀初頭と13世紀前半・14世紀前半である。遺物の種類としては、土器・陶磁器・瓦・木器がある。

## 第2節 基本層序

調査区の現標高は、西区で調査区北端が14.3m、中央地点で14.50m、南端で15.1m、南区で15.1m、中央地点で15.37m、東端で15.52m、北区が南端で14.6m、北端で14.65mである。現地表面の標高では、南東が最も高く、北西方向に向かって徐々に低くなっている。

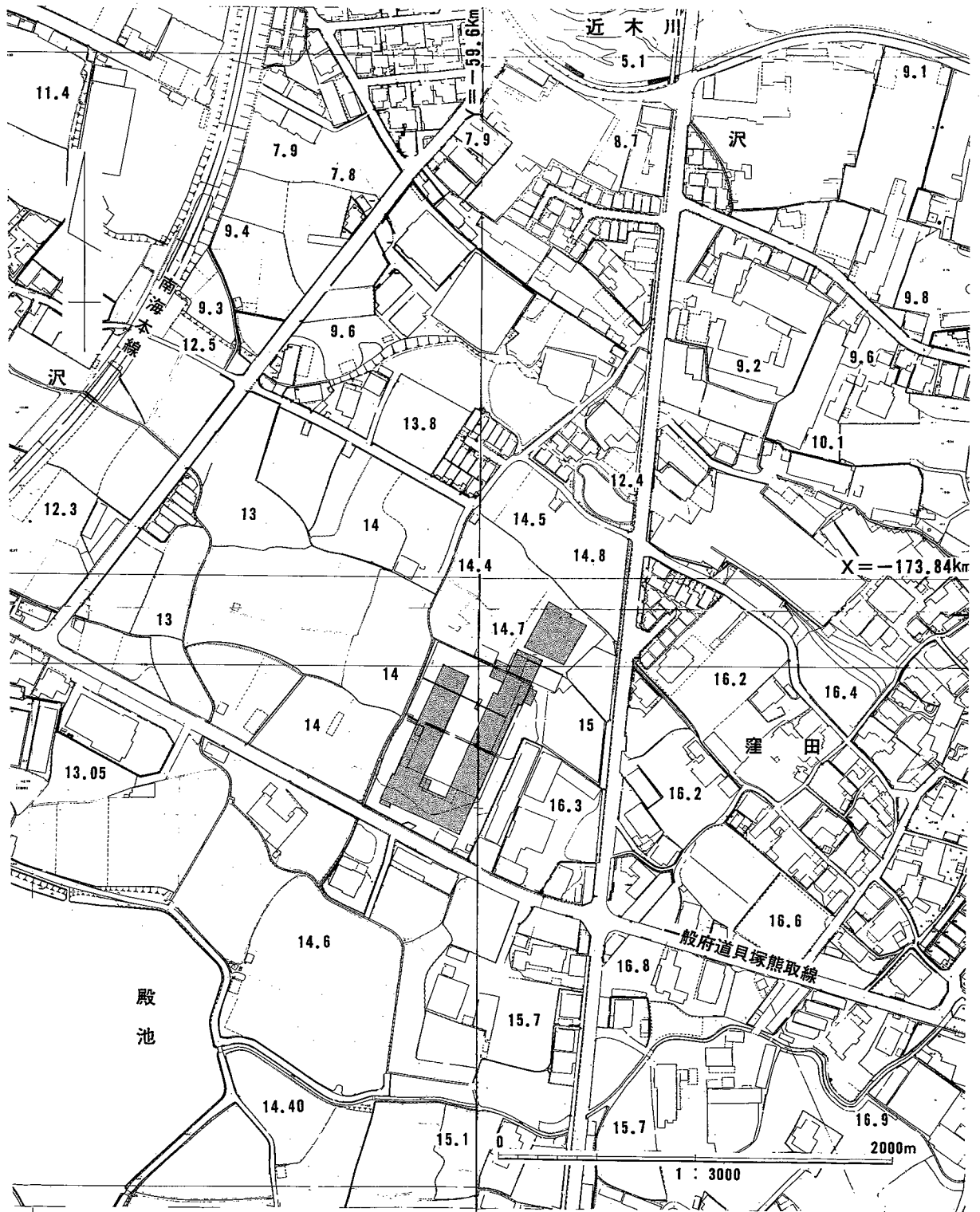
層序は、基本的に4層に区分できる。1層現代盛土、2層耕作土、3層床土、4層茶褐色土、5層黄灰色シルトの地山である。この内、1層は北区以外の全調査区に存在し、2・3層は北区と東区の北端部分とに存在し、4層は東区の北端部分と南区の東端部分に存在する。4層は中世遺物の包含層である。4層は、池の埋土の状態や地形からみて工場建設以前は、全面に存在していた可能性がある。

遺構と層位の関係は、北区の現代鋤溝は第2層上面で、東区の暗渠排水が第3層中位より、他の西区・南区・北区の遺構は、第4層上面で検出した。

## 第3節 遺構・遺物

### 1、飛鳥時代

当該期の遺構は一条の溝であるが、北区・南区の包含層中や後世の遺構から、古墳時代の須恵器の杯蓋、杯身、蛸壺が出土する。溝の位置や遺物の分布からして、当該期の遺構は、調査区の北東端から近木川方面への北方向と北西方向に広がるものと考えられる。



第3図 遺跡位置図

溝1 (第6・7図、図版5・6)

東区の北部で検出した溝がある。中央部約11mは、工場の基礎により攪乱されている。溝は、幅2m～4m、深さが東端で70cm前後、西端で30～40cmを測り、溝断面は緩やかなU字形を呈する。溝方向は、北-30°-西に振っており、窪田遺跡が立地する地形の高低差と同一方向に掘削されている。水の流れる方向は、東から西方向である。検出した調査区の最西端部分では、水の急激な流れによる凹地が確認できる。

溝内堆積土は、土質により大きく三層に区分できる。最下層は砂層を主体とする互層、中層は灰色粘土層を主体とする層、上層は黄灰色シルト層である。最下層の砂層は、地山の黄灰色シルト層が混入した箇所も存在する。

遺物は量的には、最下層から最も多く出土し、次に中層に多く、上層は少ない。小破片が多く、土師器・須恵器共に摩滅している。層位による時期差は見られず、上層から最下層にかけて、6世紀末から7世紀前半の時期の遺物である。

須恵器・土師器がある。

土師器は、碗・甑・甕・土鍾・たこ壺などがある。杯(22)は、薄く作られており、内外面は摩滅するため、調整技法は不明である。砂粒の混入は少ない。

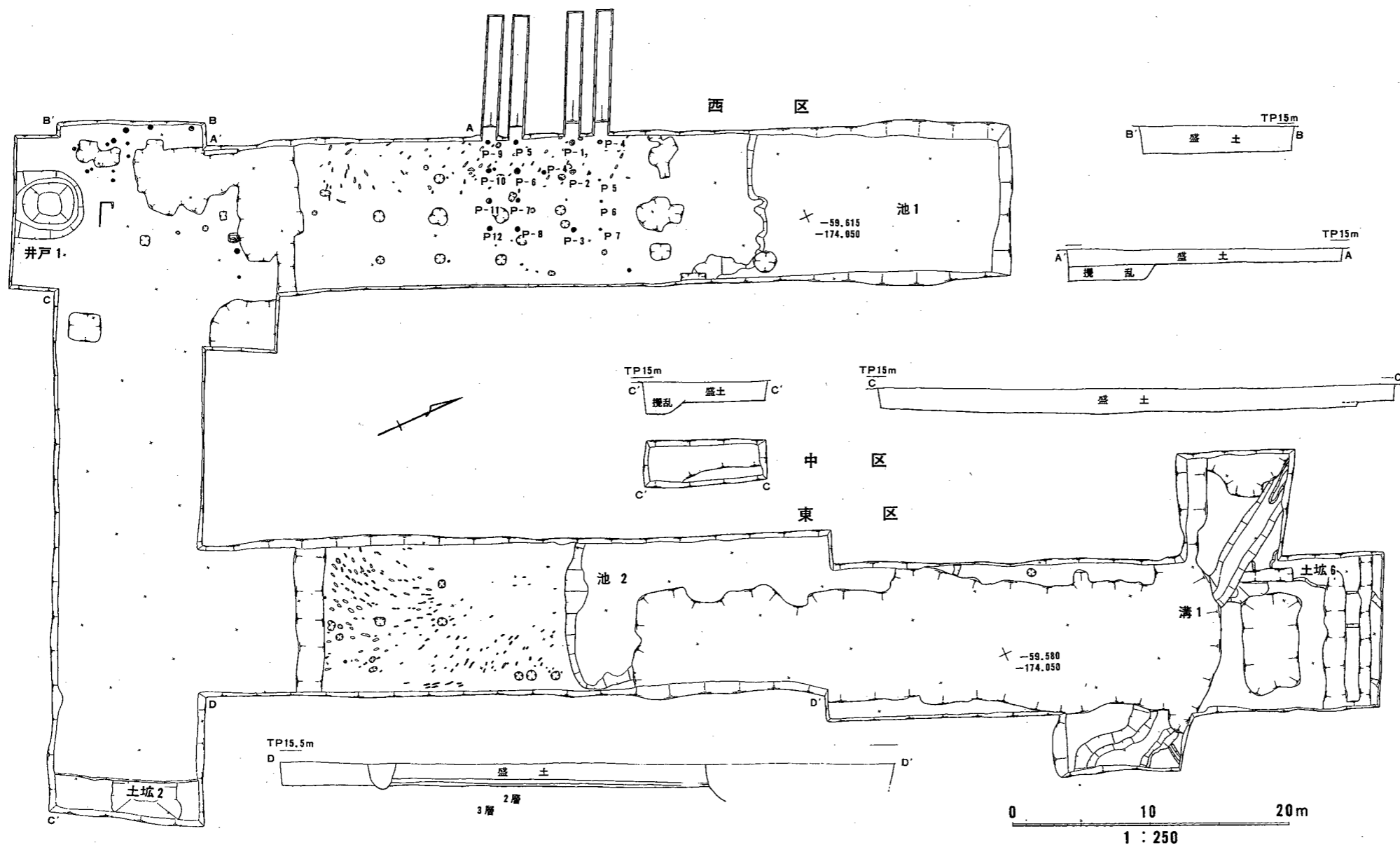
須恵器は、坏身・坏蓋・壺・甕・たこ壺がある。杯身(4・11～13)は小破片のため、口径が不正確のものがある。13以外は、退化した受け部をもち、焼成により二系統の違いが存在する。13は完形品である。底面の仕上げが粗雑である。甕(17～21)は、口縁部の小破片で、内面に青海波、外面は叩き調整されている。18は焼成が悪く瓦質の焼成である。壺(16)は、長頸壺である。わずかに口縁部が外反する。作りは薄い。

蛸壺は、須恵器と土師器の両方があるが、9は土師器、5～8・10は須恵器、10は一部が須恵器化するが全体的には土師器である。焼成が不十分で須恵器として焼成する過程で、片面のみ須恵器となり、焼成不良の部分が土師器化したものと考えられる。下端部はナデ調整され、他は荒くナデで仕上げられている。8は丁寧に仕上げられている。外面には自然釉がかかる。

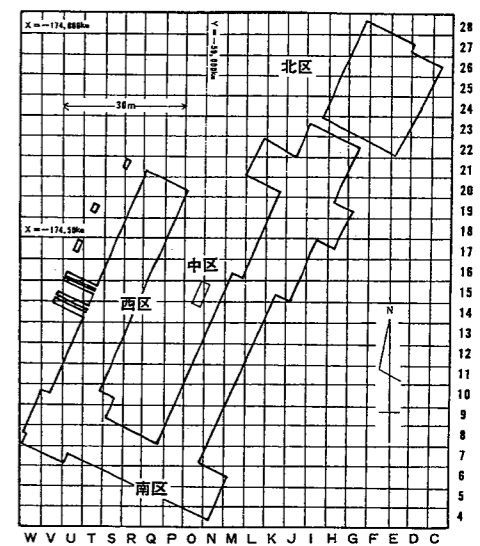
当該期の須恵器は、後世の時期の包含層や遺構に混入して、出土する。

	須 恵 器					土 師 器				
	杯 身	杯 蓋	壺	甕	蛸 壺	杯	蛸 壺	鍋把手	甕	不 明
下 層	7	5	1	14	6	0		0	0	29
最下層	6	6	2	4	2	4	2	2	20	10

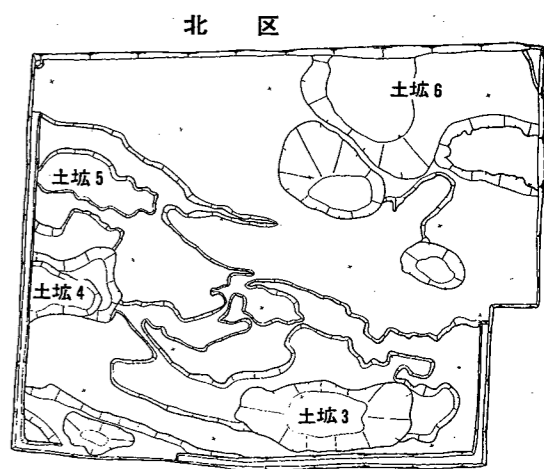
# 窪田遺跡・窪田廃寺遺構図



第5図 遺跡全体図



第4図 地区割り模式図

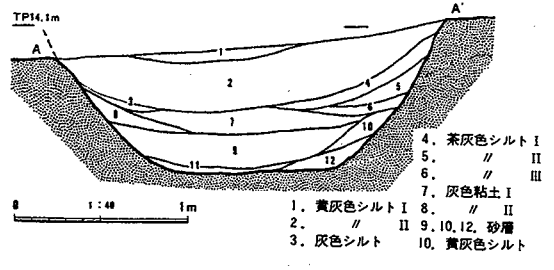
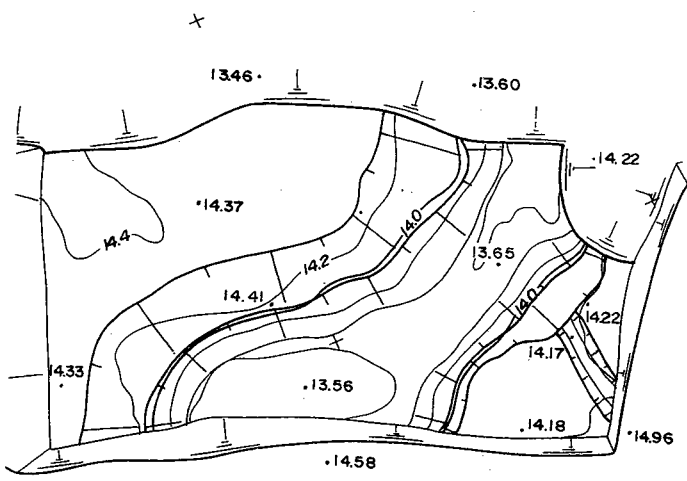
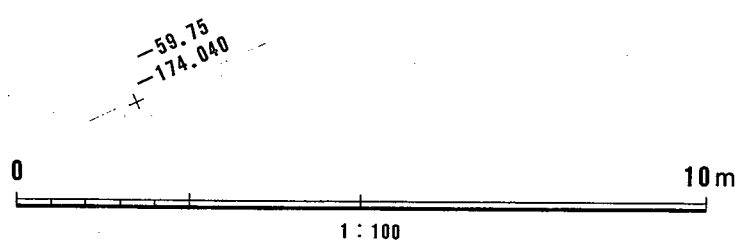
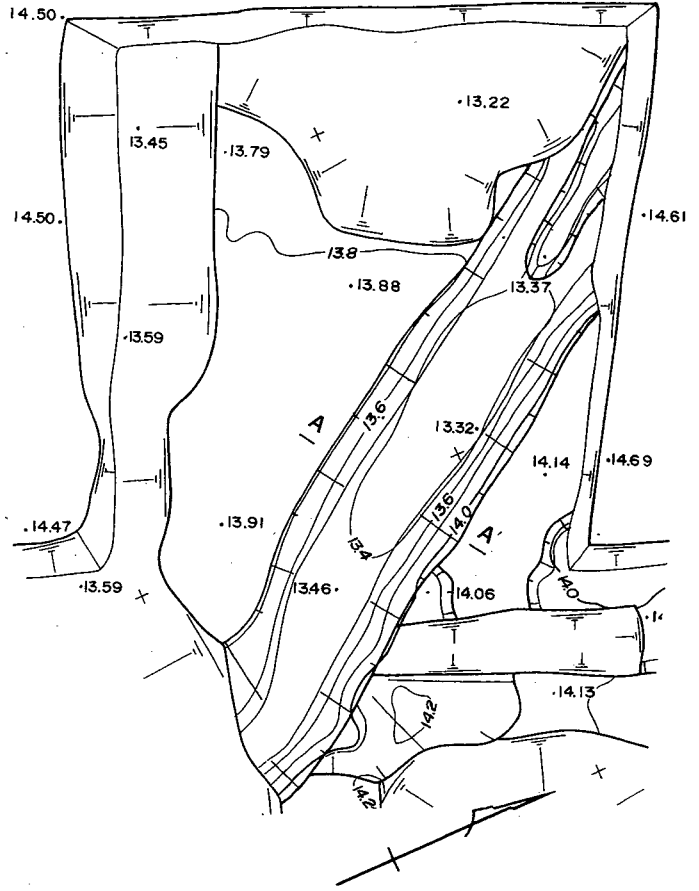


2、平安時代中期

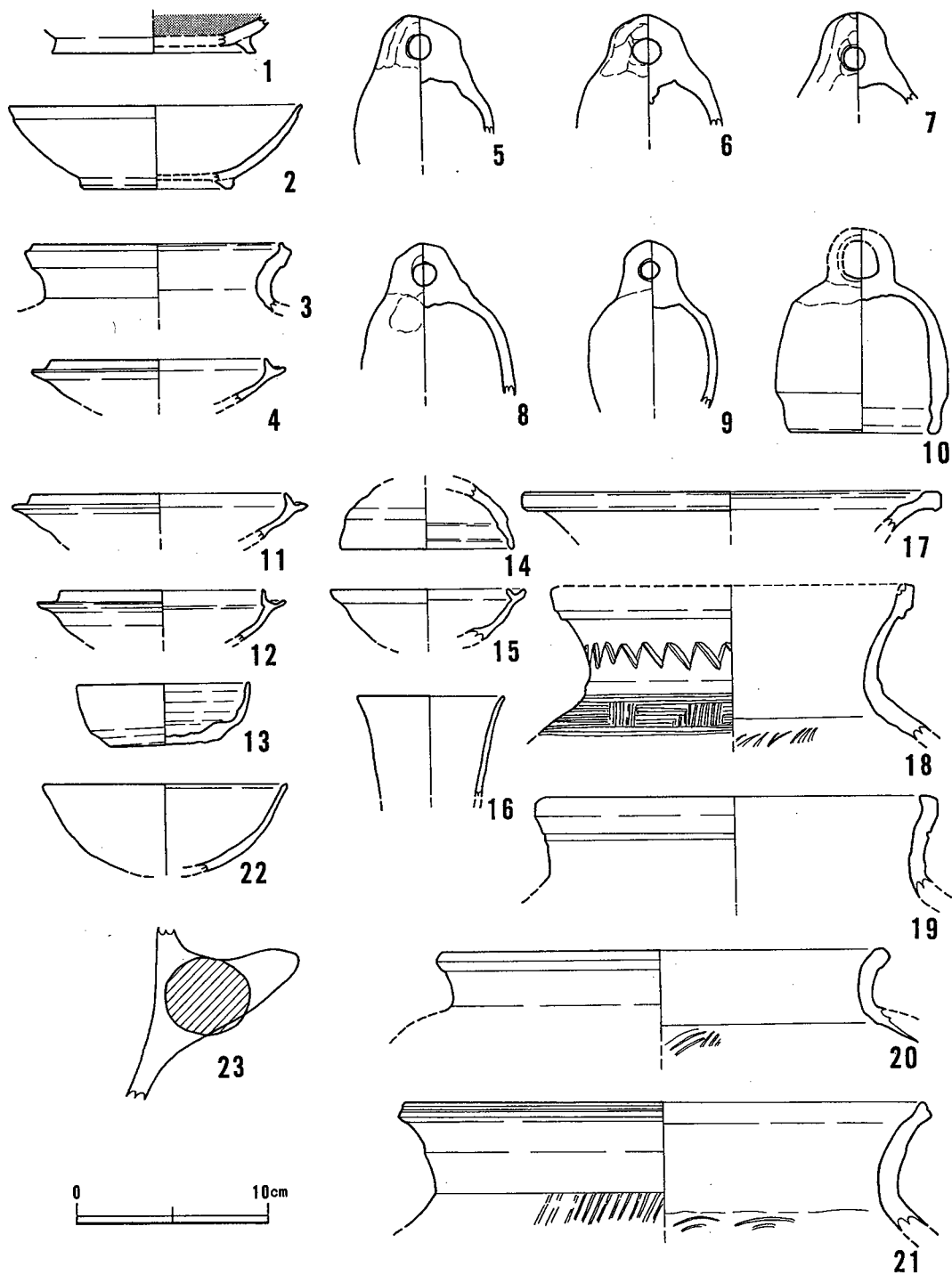
凹地

飛鳥時代の溝の最上面部分に短辺20cm・長辺50cmの不整形の凹地状の落ち込みがあり、そこから黒色土器腕A類二個体分が出土した。形状からみて遺構ではなく、単なる凹地と考えられる。

黒色土器(1・2)は、内面に炭素を吸着させたA類の碗である。1は高台部のみであるが、炭素の吸着がしっかりしており、丁寧に見込み部分をみがいている。2は、炭素の吸着が悪く、1に比較して焼成が悪く、もろくなっている。時期は10世紀前半代のものであろう。



第6図 溝1平面図・南壁土層図



第7图 沟1、凹地出土遗物实测图



### 3、鎌倉時代

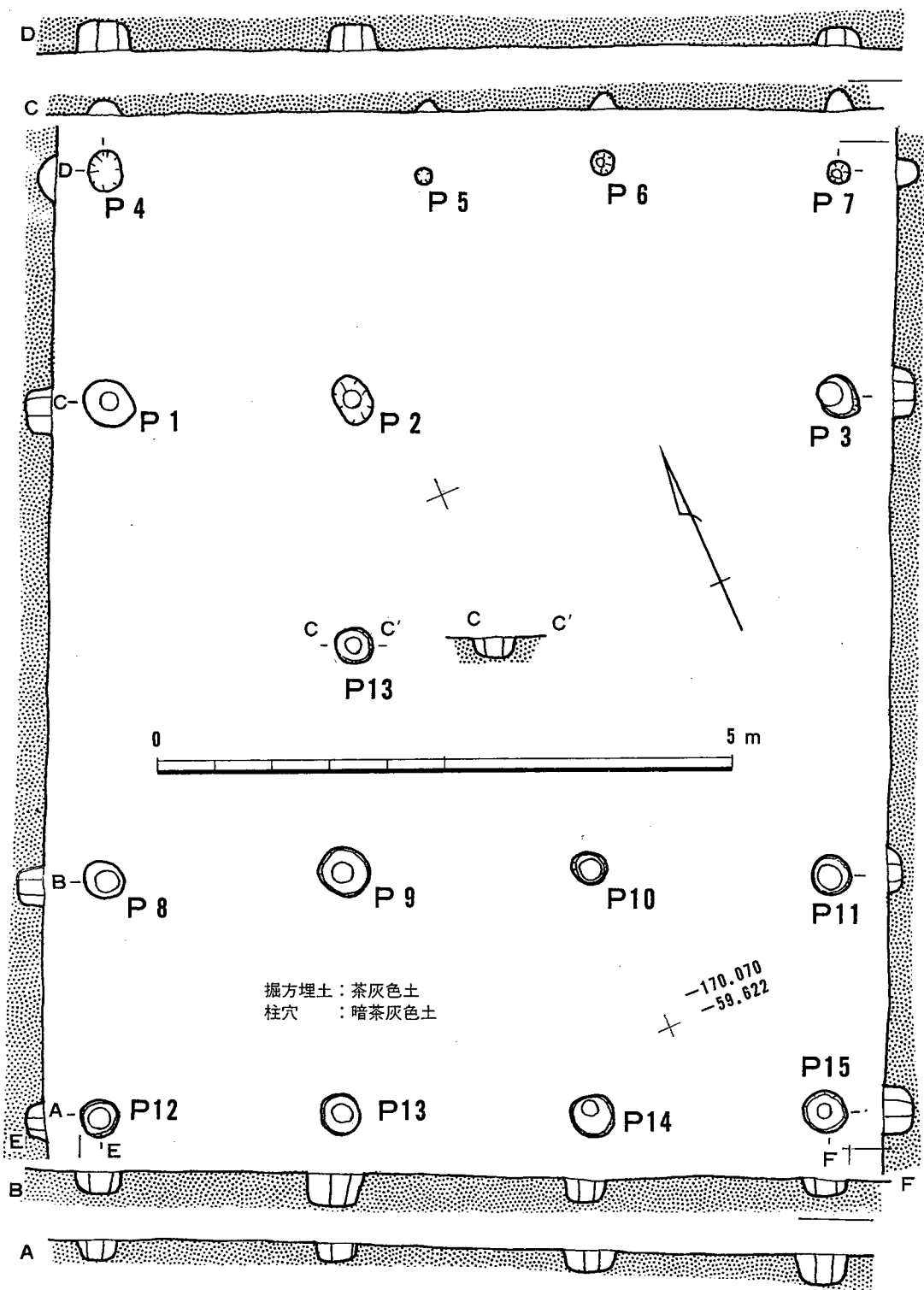
鎌倉時代の遺構は、掘立柱建物、柱穴群及び井戸がある。時期は掘立柱建物と柱穴群が13世紀前半で、井戸は14世紀前半に埋まっている。遺構は西区や南区の西部に偏って存在するが、遺物は各調査区の後世の包含層や遺構から出土する。

#### 掘立柱建物（第8・12図、図版7）

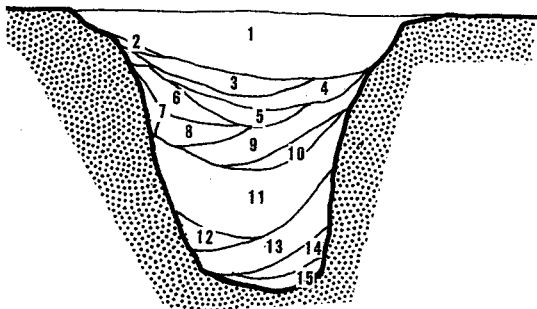
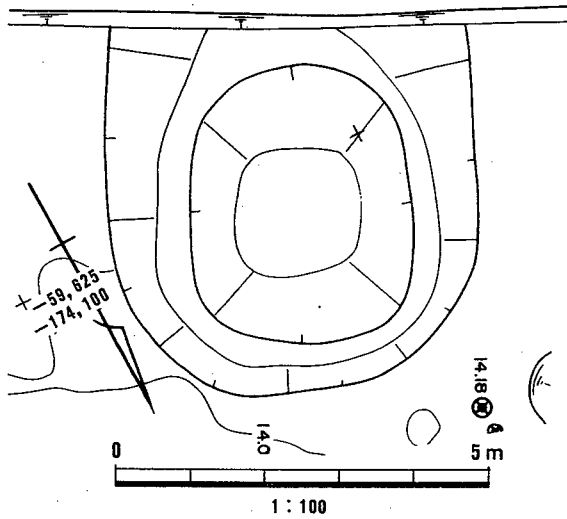
西区中央部で掘立柱建物を検出した。3間×3間の総柱と考えられる母屋に北庇がついた掘立柱建物である。建物が調査区の西北方向に伸びていないかどうか拡張して調査したが、既に工場建設の際に遺構面は破壊されていた。柱筋柱穴4～柱穴7の柱掘形がなく柱穴痕のみで、柱痕の深さが浅くて小さく、また柱間隔が他の柱掘方のものと違う等の点から、北庇になると考えられる。

梁間は6.1m、庇の出は1.9m、桁行は6.2m以上である。柱間距離は桁行2～2.1m、梁間2～2.1m、底部1.9～2mである。柱掘形は平面円形を呈し、深さは5～20cmと一定しないが、底面高さはほぼ水平にそろえられている。柱痕が認められる柱穴は、柱直径が15cm～20cmである。柱穴内の埋土は基本的に暗茶灰色土で、掘り方埋土は茶灰色土である。

遺物は柱穴1、2、6からは小破片になった瓦器碗、土師器皿が出土した。柱穴1からは、13世紀前半の瓦器碗2枚、土師器小皿3枚が出土する（第9図・図版7）。遺物の出土遺物状態は、破片になった土師器皿が出土し、その下から完形の2枚の瓦器碗が、折り重なるようにして出土した。瓦器碗は二枚共に完形で毀損していない。重なった上から出土した瓦器碗（38）は、内面見込みに斜格子の細かい、磨き調整を行ない、側壁は荒く磨き調整を施す。外面は指押さえでできた凹凸を横方向磨き調整によって平坦にしているが、粗雑に簡単に施す。外面には重ね焼の痕が明瞭に残存する。内面見込みには、重ねた痕か○の凹線部分があり、斜格子の磨き調整がこの凹部分の上に施されている。形態を規制する技法・調整や胎土からみて、和泉型のものである。重なって出土した瓦器碗の内、下からのものは（37）、内外面共に摩滅しており、調整技法など不明である。形態・胎土は38に同一であるため、同じく和泉型の瓦器碗であろう。三枚出土した土師器小皿は、一枚は底部のみの破片であるが、底部糸切り処理されたもので、紀伊産、それも胎土・色調からみて、紀伊でも有田川以南ではなく、紀ノ川流域のものである。（40）淡赤褐色を呈する色調である。小皿（39）は、ナデ調整によって口縁部が内湾気味であり、底部は指押さえによって凹む、淡黄灰色を呈する。他の小皿も同一器形で色調が淡赤褐色を呈する事を理由に一枚としたが、器形や調整の点からは、38と同一の可能性はある。

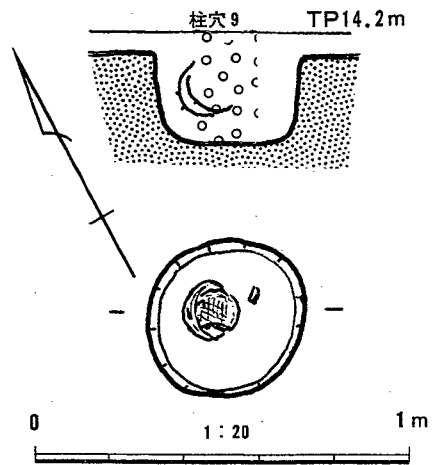


第8图 掘立柱建物 平面·断面图



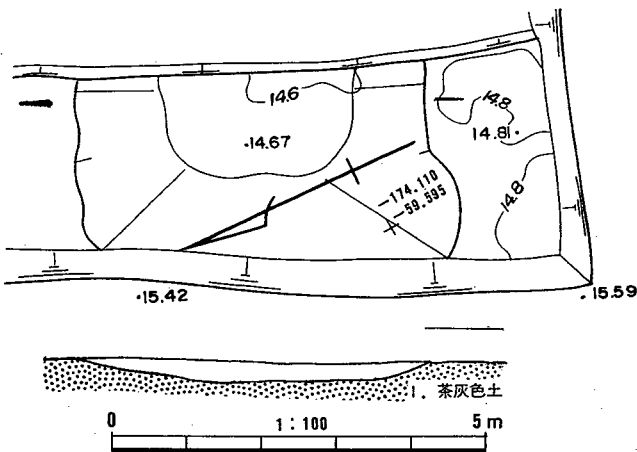
- |              |             |
|--------------|-------------|
| 上層           | 下層          |
| 1. 灰色シルト I   | 11. 灰色粘土 I  |
| 2. // II     | 12. // II   |
| 3. // III    | 13. // III  |
| 4. 黄灰色シルト I  |             |
| 5. // II     | 最下層         |
| 6. // III    | 14. 暗灰色粘土 I |
| 7. 礫         | 15. // II   |
| 8. 黄灰色シルト IV |             |
| 9. 礫         |             |
| 10. 淡黄色粘土    |             |

第10図 井戸1 平面・断面図



第9図 柱穴1 遺物出土状況

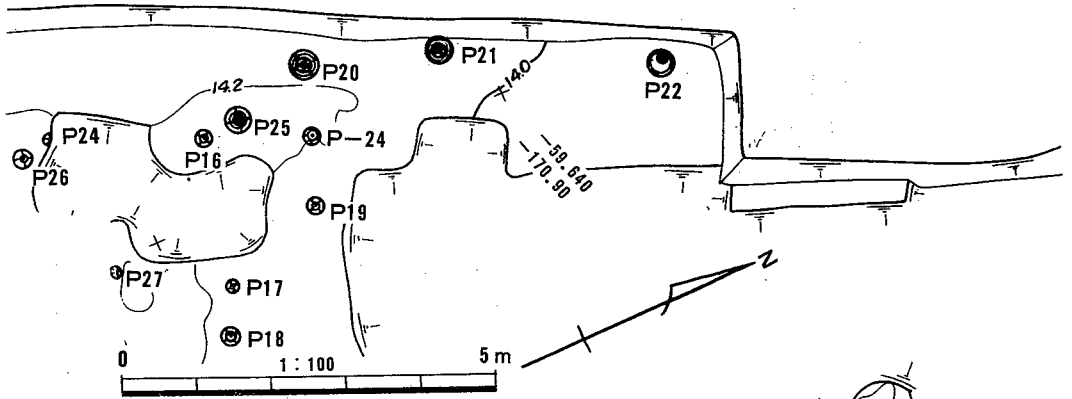
瓦器碗は建物が建つために必要な柱筋にあたり、また二枚の瓦器碗が割れておらず、柱痕の部分に埋められていることから、掘立柱建物がつくられる段階に埋納されたのではなく、廃棄される段階で埋納が行なわれたものと想定できる。瓦器碗は和泉型であるが、土師器小皿の内一点は紀伊産の小皿である。建物を放棄する際に埋納が行なわれ、貝塚市では極めてまれな存在である紀伊産の小皿を、地鎮という儀式に使用した点が重要な意味を提起する。



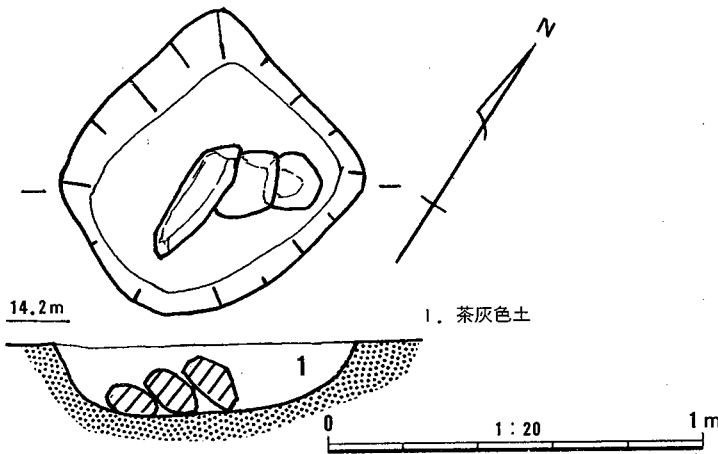
第11図 土坑2 平面・土層図

柱穴群（第9・10図、図版7）

南区の西端で柱穴群を検出した。東に拡張して調査したが、既に工場建設の際に破壊されていた。柱穴は15個検出した。この内、柱掘り方を持つものは、P18、P20、P21、P22、P23、P25で、他の柱穴は柱掘り方がない。前者は、掘り方規模は30cm前後、柱痕は10cmから15cmの円形や楕円形を呈する。深さは20cmから30cmである。後者は、平面形円形や楕円形を呈し、10cmから20cm、深さは10cm前後である。柱穴群は、相互に関係を持たず、掘立柱建物として建つことはない。柱穴群のうちP21は、他のピットと規模が違い、50cm前後の掘り方をもち、また根石を据えている（第10図）。掘立柱建物の規模としては、他の掘立柱建物とは違って大規模であったことが想定できる。遺物は、P16～P22から出土する。中世の瓦器・土師器である。P16からは、瓦器碗、土師器皿が出土する。瓦器碗は小破片で、器形の判明する碗は、高台部の破片である。摩滅しているが、退化した高台である。土師器皿は大皿で、二回のナデ調整によって、口縁端部が尖り気味になるものであ



第12図 南区柱穴群 平面図



第13図 柱穴22 平面・断面図

る。P17からは瓦器椀・土師器羽釜が出土する。瓦器椀は（42）高台部の破片で、摩滅している。高台部径は4cmを測る。羽釜は小破片である。P18からは、瓦器椀・皿、土師器皿が出土する。瓦器椀は、摩滅のため、内面の磨き調整は不明である。外面には指押さえ痕が3段にわたって施される。瓦器皿（44）は、焼成がしっかりしている。P21からは、瓦器椀・土師器皿が出土する。瓦器椀は（45）、高台部が断面台形を呈し、高台径が4.5cmのしっかりした作りである。内面には平行線の磨き調整が施される。高台部の破片だけであるが、作りや形態から判断して、時期は13世紀前半代を前後するものと考えられる。

	柱穴1	柱穴2	柱穴6	柱穴16	柱穴17	柱穴18	柱穴19	柱穴20	柱穴21	柱穴22
瓦器椀	5	1	5	5	20	21	3	3	3	1
土師器皿	4			1	2	3		3	1	
不明				3						

#### 井戸1（第10図、図版8）

南区西端で検出した。5mの隅丸方形の掘り方をもち、深さ約3.5mを測る。井戸は素掘である。堆積土は、土質や堆積状況によって、上層・下層・最下層に三区分できる。上層は掘り方部分に堆積した層で、シルト層と礫層を主体とする。礫層は埋めるときに人為的に使用した土と考えられる。遺物は小破片となっているが、量的には多く出土する。また平瓦の破片が多い。下層は灰色粘土層である。大きく二層に区分できる。遺物は完形の瓦器椀があるが、土師器は小破片となっている。最下層は井戸の最底面に堆積した層で、粘土層である。

遺物は各層から出土した。量的には上層が多く、次いで下層で、最下層が最も少ない。

最下層は、瓦器椀、土師器皿が出土する。瓦器椀は、側壁の磨き調整は荒く太い。見込みには平行線の磨き調整を施す。土師器皿は、大小二種類ある。大皿は、乳白色の色調を呈し、口縁部のナデ調整に特色がある。口縁部をナデ調整したあと、さらに口縁端部を外からナデ調整するため、口縁端部が鋭く尖りかげんになるものである。柱穴16から同一の技法の土師器皿が出土する。

下層は、瓦器椀、土師器皿、羽釜、須恵器が出土する。瓦器椀は、側壁と見込みを区分なく荒く、太く磨くもので、見込みには連結輪状の輪を三つあるいは四つ施す。（30～34）他に平行線の暗文も存在する。高台は退化した直径3cmほどのものを付ける。土師器皿は小破片である。羽釜は、外面に煤の付着がある。通有の和泉型羽釜と共に胎土や砂粒の混

入からみて、紀伊型と考えられる羽釜がある。口縁端部を僅かに尖らすものである。当該期の紀伊型の羽釜は、体部上方に既に退化した鏝を付けるか、あるいは既になくなってしまっているか微妙な時期である。

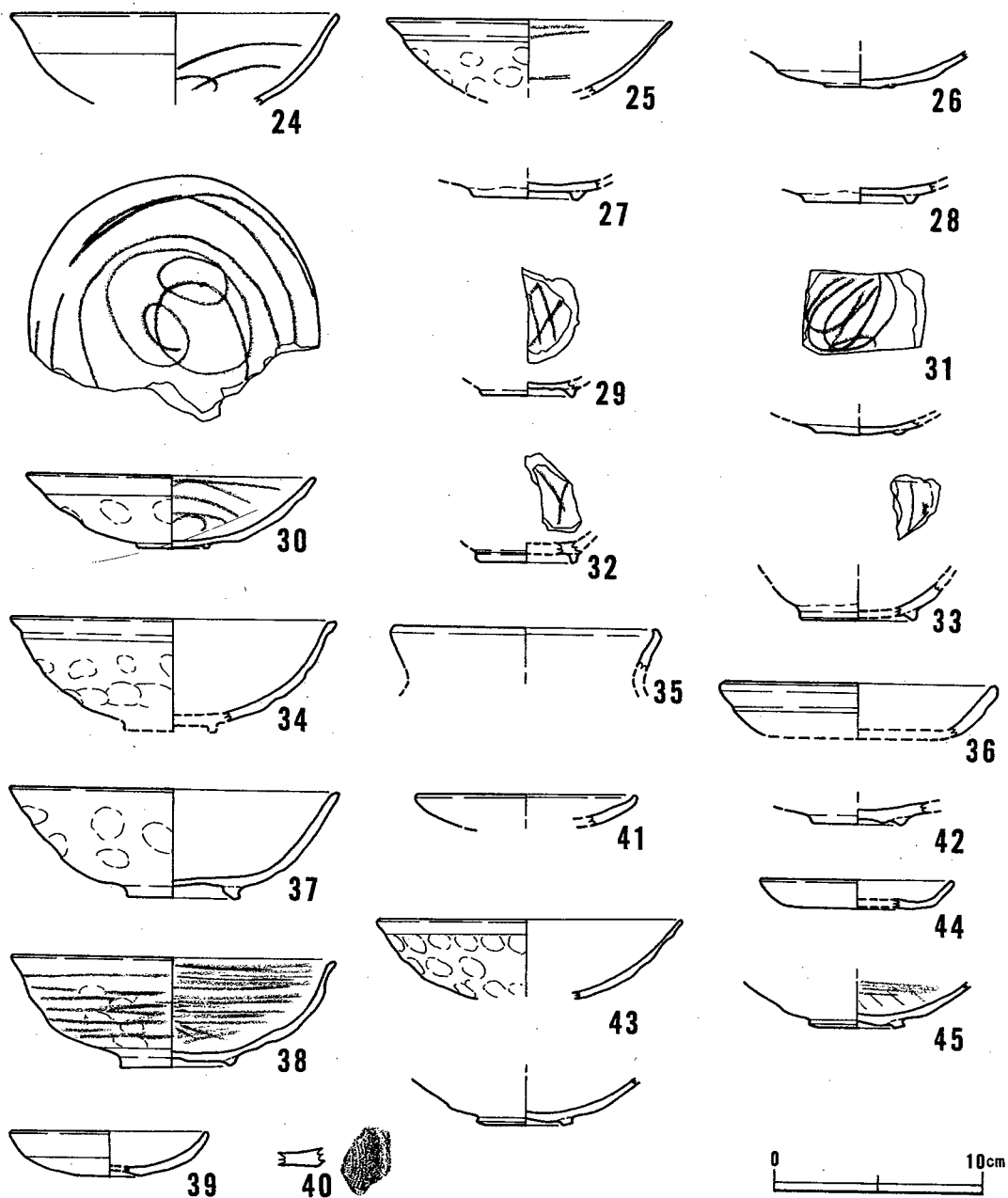
上層には、瓦器碗、土師器皿、羽釜、青磁碗、白磁碗、平瓦、丸瓦、須恵器等が出土する。瓦器碗は（24～28）、小破片で摩滅したものが多く、平行線や、連結輪状などの暗文を持ち、後者は側壁と見込みの区分をしないで一気に施す。高台は退化したほとんど意味をなさない、直径3cmほどのものを付ける。土師器皿は、小破片が多い。最下層で出土した大皿と同一のものである。乳白色の色調をもち、良好な胎土の、口縁部に特徴をもつ大皿である。井戸1からも同一の器形・技法を持つ皿が出土している。羽釜は、口縁部が玉縁状になった和泉型の羽釜と共に、胎土からみて紀伊型と考えることができる羽釜も出土する。須恵器は、古墳時代の坏蓋が2点出土し、他に外面に細かい正格子のタタキをもつ器形がある。青磁碗は、体部外面に連弁をもつ。白磁碗は底部平坦なものである。瓦は、平瓦37、丸瓦5が出土する。全体的に摩滅した小破片が多い。二次焼成を受けたのか、赤褐色化した瓦も存在する。平瓦は、外面に縄目のタタキをもち、内面には布目をもつ。

最下層から上層までの遺物を分層して取り上げたが、各層の時期は瓦器碗を指標とすれば、同一の時期と考えられる。既に退化した高台をもつことから、13世紀末から14世紀前半の遺物である。遺物としては、紀伊型の羽釜の可能性をもつ遺物が出土した点や当遺跡では多くない瓦の出土をみた点が特記される。

井戸1	瓦器	土師器	羽釜	須恵器	青磁	白磁	平瓦	丸瓦	不明
上層	156	43	19	8	5	5	37	5	
下層	94	25	14	4	0	0	0	0	
最下層	12	4	0	0	0	0	0	0	

#### 土坑（第11図）

南区の東端で検出した。南区はほぼ全面攪乱を受けていたが、東端のみ後世の攪乱を受けず、包含層・遺構が残っていた。土坑は、不整形な形状を呈し、一辺4.5mである。深さは13cmと浅い。遺物は瓦器碗が1点、体部の破片が出土した。13世紀代の遺物である。



第14図 中世遺物 実測図

井戸 | 上層 (24~29)

井戸 | 下層 (30~36)

柱穴 (37~45)

#### 4、近世～現代

遺構は、粘土採り土坑、池、鋤溝、暗渠排水がある。調査区の西、東、北区から検出できる。

##### 粘土取り土坑3～6（第13図、図版10）

北区と東区北端で、平面形が極端に不整形で、底面が凹凸の土坑を4箇所検出した。地山の黄灰色シルト層中に小石のある部分をさけて掘削したため、不整形の土坑になったと考えられる。各土坑共に、一ヶ所2m×4m前後の方形で深い部分がある。最も深い地点の深さは、土坑3が0.86m、土坑4が0.57m、土坑5が0.22m、土坑6が1.17mである。

粘土取り土坑とした理由は、調査区がシルト層の地山であるが、部分的にシルト層に小石が混じる地点は明確に避けて掘削しており、良質な土のみを採集している点による。埋土は一層で、地山のシルト層や中世包含層がブロック状に混在している。粘土取りのためにできた凹凸を短期間のうちに埋めたものと考えられる。形状からみて、よく似た時期に掘削・埋め立てられている。それは出土遺物からも裏付けられる。

遺物が出土したのは、土坑3、6である。土坑3・6共に、出土遺物はよく似た様相を呈する。遺物の時期は、中世から近世・近代の時期までを含む。小破片で摩滅している。古い時代の混入遺物は、瓦器碗・皿、土師器皿・羽釜・土錘、須恵器坏蓋・坏身・甕・壺、東播系摺鉢、瓦質羽釜、瓦は軒丸瓦、軒平瓦、白磁碗がある。また、土坑6からは、14世紀代の紀伊型甕が出土する。最も新しい時期の遺物は、近世～近代にかけての染付碗、陶器類が出土する。

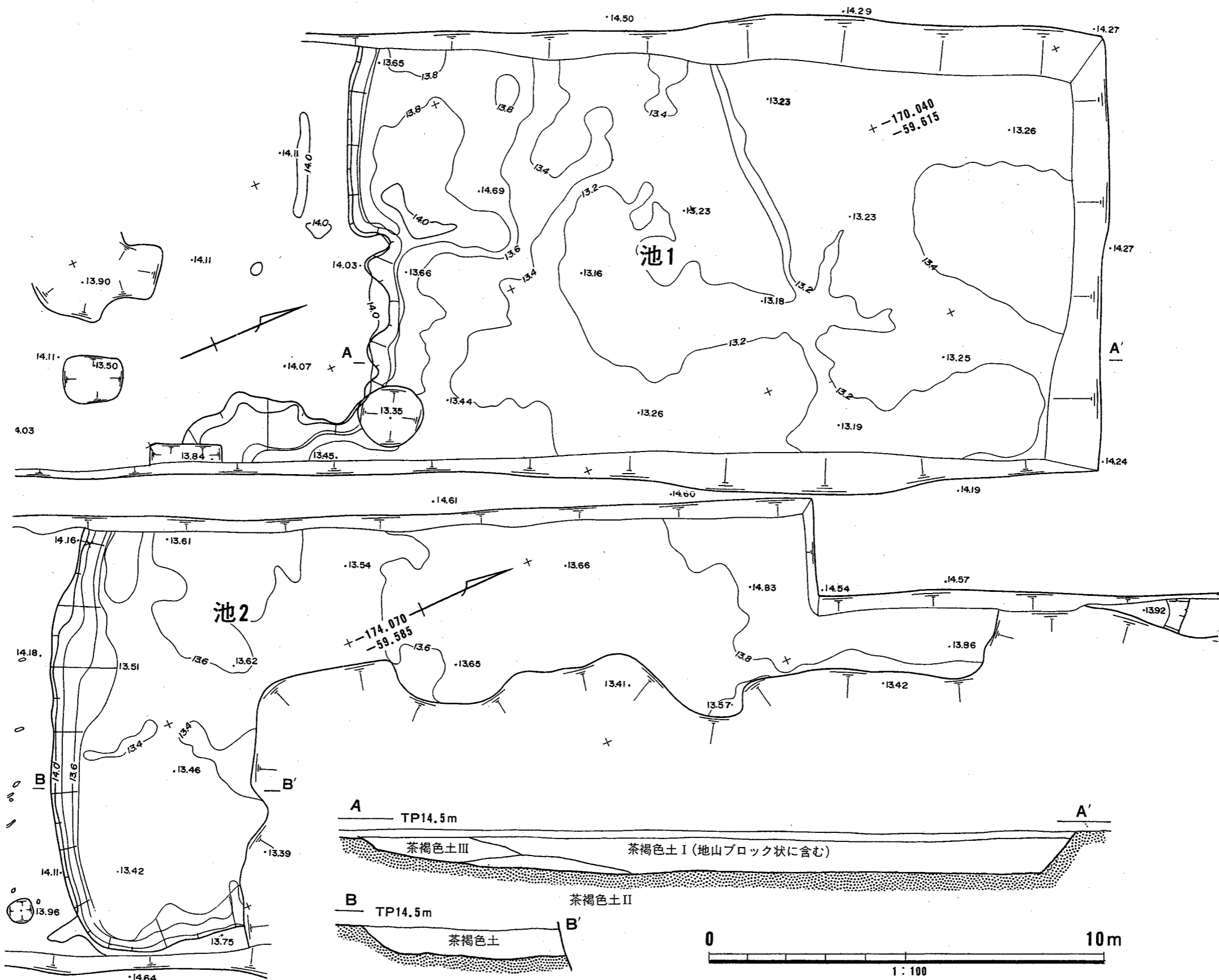
粘土採り土坑の掘削時期は、底面の凹凸や形状から想定して機械を使用しておらず、バックホー等がない段階のもので、陶磁器など新しい遺物が存在する時期と想定できる。

##### 池1・2（第16図、図版9）

西区北端と東区中央部分で検出した。西区・池1は、調査区を東南に横切る形で、東区・池2では調査区を東南に横切り、なだらかな曲線を描く東端と北端部分を検出した。位置関係・堆積土からみて同一の遺構である。西区はなだらかに落ち込み、底面は凹凸が激しい。幅が狭く、細長い溝状の落ち込みが縦横に走る。深さは、90cm前後でほぼ安定した底面を形成する。東区の池の底面は、西区に比べて凹凸が少なく、平坦である。池の南端の落ち込み部分は、急勾配であるが、北端は緩やかである。深さは、70cm前後である。埋土は、茶褐色土一層であるが、細かく固まりになった地山の黄灰色シルトや中世包含層がブロック状に混在する。両区の埋土ともに硬くしまっておらず、歩くと地面が沈むかのよ







第16図 池1.2 平面図 土層図

うな状態を呈する。堆積状況からは、短時間のうちに一気に埋め立てられた層である事が判明する。なんらかの理由で平坦面にする必要がある段階で、まわりの地山や包含層を削りながら、水分を含んだ状態で埋め立てられたものと考えられる。

遺物は、量的には池1に比較して池2は少ない。混入遺物としては、池1・2からは、古墳時代の須恵器杯蓋、壺、鎌倉時代～室町時代にかけての少量の瓦器椀や土師器皿、東播系の摺鉢、青磁碗、瓦質羽釜、摺鉢等が出土し、池1からは、染付の椀、平瓦など近世～近代段階の遺物が出土した。池2からは、近世～近代の陶磁器、染付が出土する。また、木器が出土する（図版11）。

#### 鋤溝（第5図、図版12）

北区と東区の北端部分で、現在の畑と同一の方向で鋤溝を検出した。他の地区では鋤溝は検出できない。

#### 井戸（第5図）

西区で検出した。約1mの円形で、池の埋土を切ってつくられる。遺物が出土しないため時期は不明ながら、池が埋まって以降の時期、現代の範疇で考えることができる時期の遺構である。

#### 暗渠排水（図版11）

東区と西区で検出した。西区は、第1層盛土層を除去した段階で検出し、東区は第3層上面で検出した。方向や規模から考えて、東・西調査区で検出した暗渠排水は同一と考えることができる。暗渠の中には小さな石が疎な感じで入れられていた。時期は層位から考えて、近代から現代のものと想定できる。

#### 5、包含層出土遺物（図版14）

原位置を離れた各時代の遺物が出土した。工場建設の際に、安定した地盤を得るために、凹凸をなくし、地面を削り埋め立てたために、包含層や遺構を掘削したためにおこったものと考えられる。

古墳時代の須恵器やたこ壺などほぼ検出遺構の時期の遺物が出土する。

## 第4章 まとめ

窪田遺跡の今回の調査では、6世紀末～7世紀初頭、8世紀、10世紀、13・14世紀、15～20世紀の各時代の遺物が出土し、6世紀末～7世紀初頭、13・14世紀では遺構に伴っていた。

これらの時期は、遺構の有無にかかわらず、貝塚市域の他の遺跡と共通する所が多い。ここでは遺構の存在した時期について、市域の他の同時期の遺跡との関連を中心に、簡略な予察を述べてみたい。

### 6世紀末～7世紀初頭

いわゆる飛鳥時代の遺構・遺物は加治・神前・畠中遺跡、堀遺跡、沢遺跡で検出されている。遺構はいずれも溝や土坑が主で、住居跡や墓などは知られていない。加治・神前・畠中遺跡では、前段階である6世紀後半の住居跡群がコモ池の西側で発見されていて、当該時期の集落の中心もこの地点から遠くないところと考えられる。

いずれにしても、近木川右岸の加治・神前・畠中、津田川左岸の堀、近木川と見出川の間、中間の沢・窪田といった遺跡は、現海岸線から一定の距離をもち、河岸段丘上の比較的安定した平坦面に立地していると言える。

遺物では飯蛸壺形土器が多いことが注意される。この時期の飯蛸壺形土器はいわゆる吊り鐘型あるいは鐸型とされるもので、鈕状の吊り下げ部分をもち、須恵質のものが多い。こういった須恵器飯蛸壺形土器は、これ以前の土師質のものとは違い、陶邑古窯跡群中のこの時期の窯で須恵器とともに数多く焼かれていることが判明している。

このような事実と須恵器生産の画期を結びつける指摘は早くからなされていたが、須恵器に限らず、この時期の窯業生産全体の特質を考えると、供給先（古墳・寺院・集落その他）の目的に応じた生産形態・生産品の組み合わせに多様性が生じてきていることを知ることが出来る。

貝塚市域の当該時期の集落遺跡出土遺物の組み合わせは、（土師器）＋須恵器日常雑器＋飯蛸壺形土器＋（土鍾）であるが、このうち（）で括らないもの（あるいは土鍾も）は須恵器窯からの一元的な供給を受けていた可能性が高い。このような需給のあり方は、古墳・寺院の場合と同じく、国家や支配層の側に立つ特定の目的に沿ったものであることが想定されるのである。すなわち、集落で使用する（須恵器）日常雑器だけでなく、生業のため

の飯蛸査（形土器）も最初から需要を想定して計画的に生産して供給したと推定されるのである。

以上のような前提に立ち、飯蛸壺形土器を真正のタコ壺であると仮定すると、貝塚地域の6世紀末～7世紀初頭の集落は、この時期に多くなってくるいわゆる「国家主導型開発」に伴うものである可能性が高い。遺構に溝が多いことや出土須恵器・飯蛸壺形土器の生産と供給の背景がその根拠となろう。

### 13・14世紀

13・14世紀は、1984年度に澱池の南東約100mの窪田遺跡内ほぼ中央部での発掘調査検出遺構の中心時期で、二箇所の調査区を含む地区がこの時期の遺跡の中心のひとつと考えられる。

当該時期の主要な遺構は掘立柱建物（13世紀）と井戸（13世紀末～14世紀前半）である。

掘立柱建物は東西3間以上、南北3間の身舎の北側に庇（あるいは縁）がとりついた構造と考えられる。身舎部分の柱間寸法は両方向とも7尺（2.1m）を基本としており、中世集落の建築遺構でよく見られる極端なばらつきは見られない。身舎内部にも柱穴があり、いわゆる総柱建物であるが、柱穴が確認出来ない箇所もあり、内部の間仕切りに検討の余地を残している。

この建物が想定通り東西（桁行）3間以上として論を進めれば、このような総柱建物は泉南地域の中世前期の遺跡で多くの類例を見出し得る。泉佐野市湊遺跡・日根野機場遺跡、熊取町東円寺遺跡、和泉市和気遺跡など12世紀後半から13世紀にかけてこのような建物はかなり一般的になってくる。しかし、具体的な展開の様相は小さな地域ごとに異っている。窪田遺跡が存在する近木川左岸では次のような例がある。

**澱池遺跡** 1983年度調査のA区では梁間4間、桁行6間で北側に庇（縁）のつく建物（SB-1）が検出されている。柱間は梁間・桁行ともに3尺（2-1m）等間で、かなり規則的である。庇（あるいは縁）は北側4間分以外にも、南側に2間分、西南隅に1間分がつくと考えられている。時期は12世紀中葉～後半とされるが、若干下る可能性もある。この建物の西南に接して東西3間、南北1間以上の建物（SB-2）が存在し同時期と考えられている。

この地点から西に150mの1988年度調査区でも4間×6間以上の総柱建物が検出されているが、調査面積の制約のため詳細は明らかでない。時期は13世紀と考えられている。

**沢遺跡** 1987年度の調査区で、梁間3間以上、桁行5間の東西方向の総柱建物が検出された。柱間は梁間が1.85～2.05m、桁行が1.85～2.25mとばらつきがある。庇（縁）は北側に5間分つくと考えられている。時期は13世紀である。

**地藏堂遺跡** 1981年度の調査区で、梁間方向が1.65, 1.8, 1.8mと一定しないが、桁行方向は1.8m（6尺）等間である。南側に3間分の庇（縁）がつくとされるが、東側にも4間分以上、北側にも1間分以上つく可能性がある。西側3mの地点に南北方向の柵列が6間分検出された。時期は「中世末」とされているが、付近の土坑出土の瓦器碗は13世紀のものである。

以上の総柱建物遺構と窪田遺跡の今回の掘立柱建物を併せ考えると、やや時期がさかのぼる澱池遺跡以外は梁間3間、桁行3間以上（5間？）程度の規模を有し、一方向以上に庇（あるいは縁）が付されているという共通性を指摘出来る。

建物の詳細な構造を復原することは不可能であるので、これらが共通する性格を有していたかどうかは明らかでない。しかし、少なくとも13世紀の近木川左岸地域では、このような総柱建物が居住単位の主体となっており、同様に澱池遺跡以外では接する位置に建物造構が見られず、他の民住単位との間に明瞭な区画施設をもっていないことも注意されよう。また、各居住単位（屋敷地）は集中していると言えず、むしろ、互いに一定の距離を置いて存在しているとみることが出来る。

これは総柱建物が居住単位の主体でなく、各々の間に明瞭な区画施設をもつ高槻市官団造跡の13世紀の屋敷地群とは明らかに差違を認めることが出来ると言えよう。

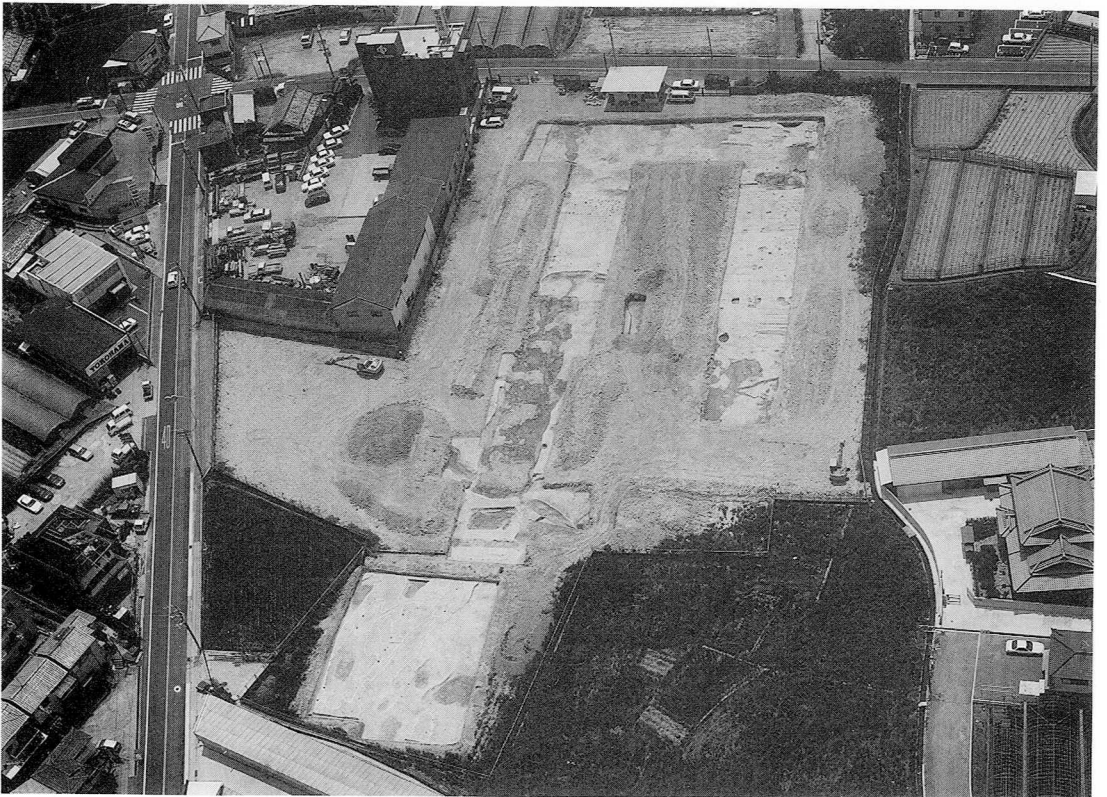
沢・澱池・窪田の各遺跡は西北から東南に連らなり、やや離れているものの地藏堂遺跡も同じ近木川左岸の台地上にあり、地形からする地域的まとまりのなかで、これらの建物群・居住単位群・遺跡群の性格を考えることが今後の課題であると言える。

圖

版



遠景 (西より)



遠景 (北東より)





西区 全景 (北東より)



南区 全景 (北西より)



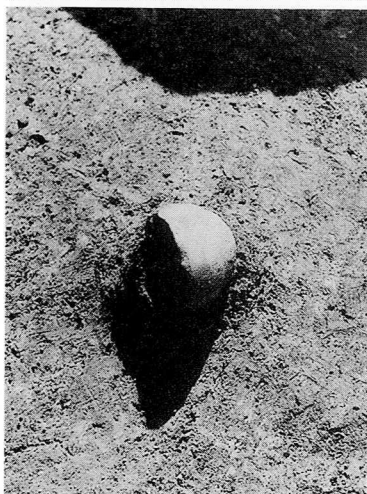
東・北区 全景 (南西より)



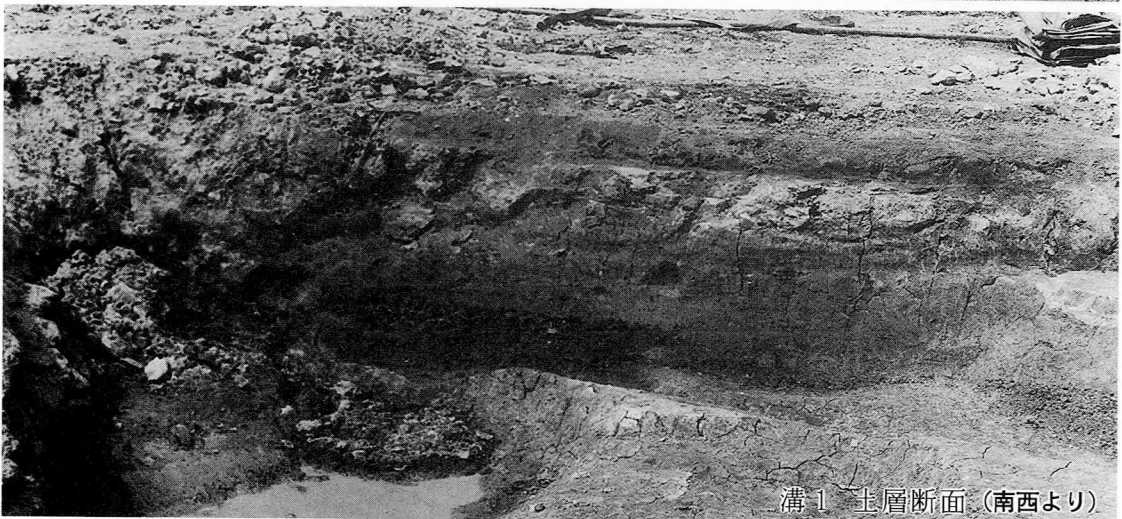
溝（南東より）



溝 (西より)



溝 1 遺物出土状況



溝 1 土層断面 (南西より)



西区 掘立柱建物 (南東より)



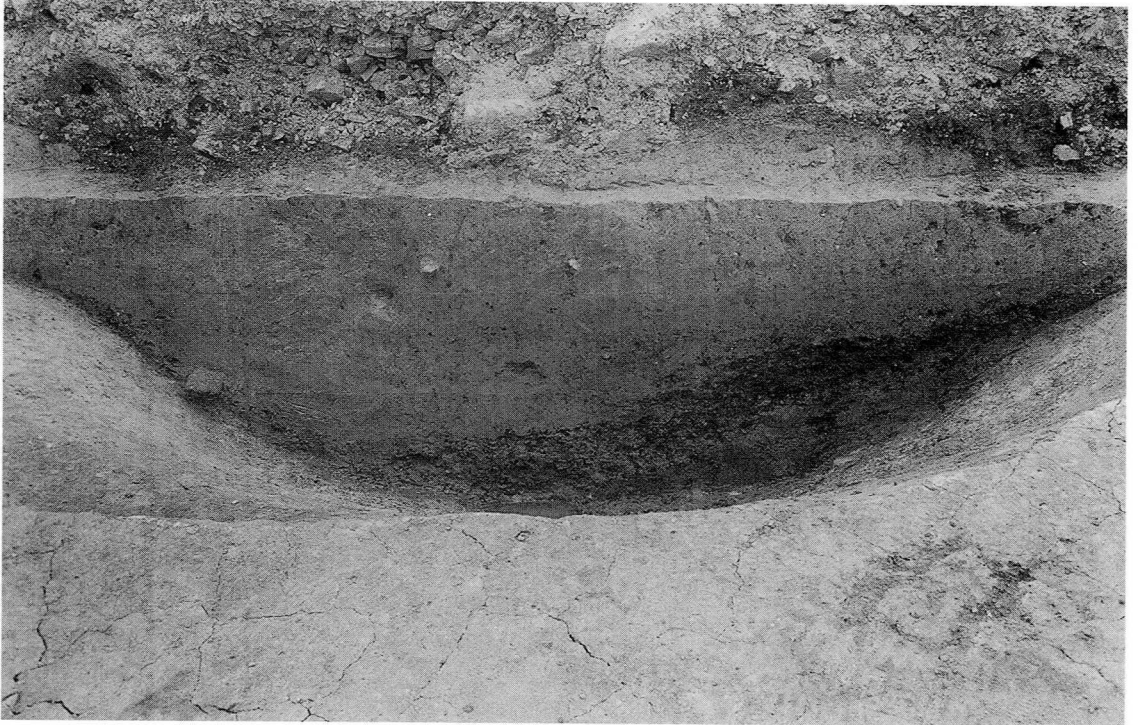
柱穴1 遺物出土状況



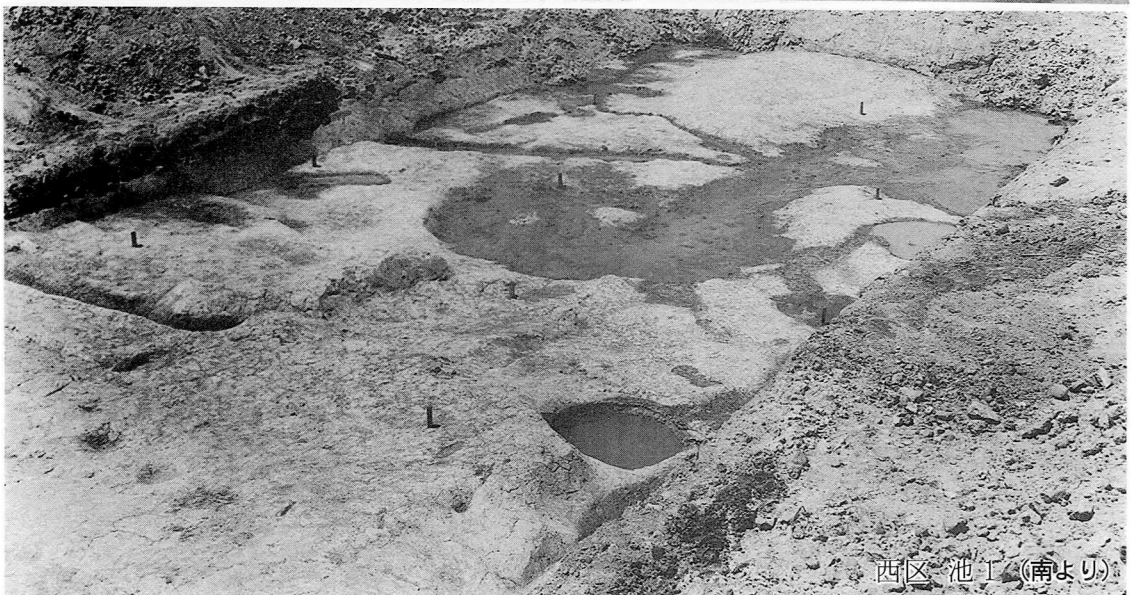
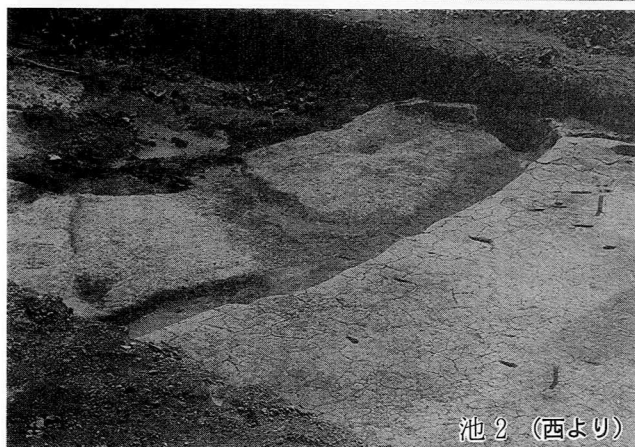
西区 柱穴群 (北西より)



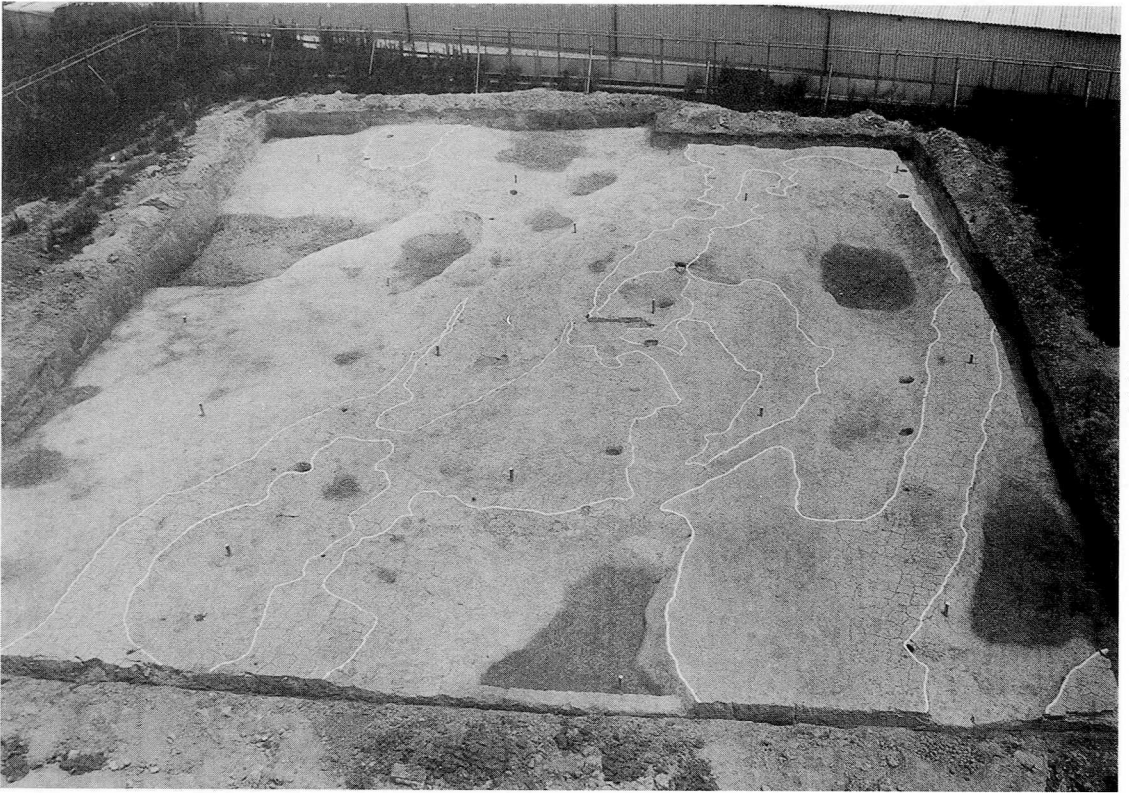
井戸（北東より）



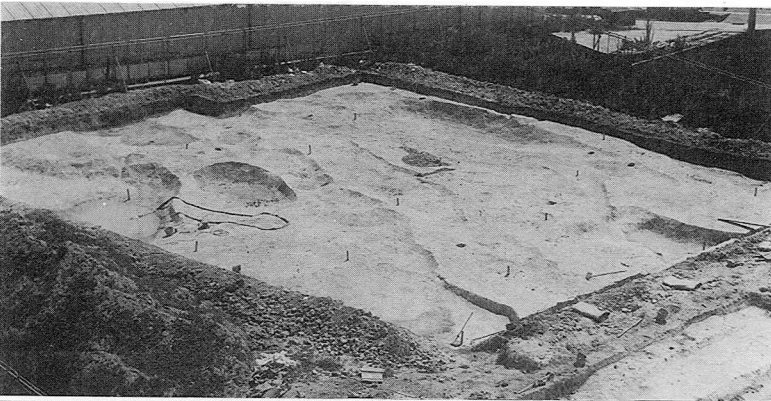
溝 土層断面



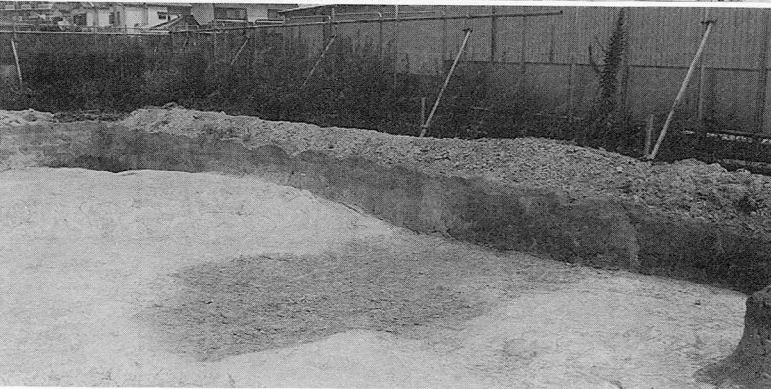




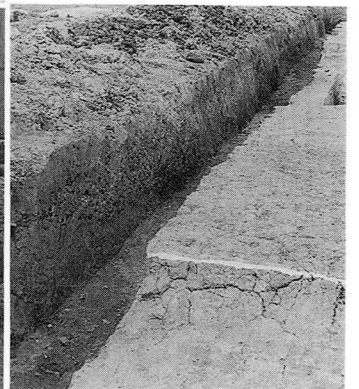
北区 粘土採掘坑 (南西より)



同上 (西より)



北壁 (左下)、南壁 (下) 土層



図版11 遺跡 近世、近代遺構



北区 粘土採掘坑底面状況



東区 中央部地面状況



北区 現代鋤溝



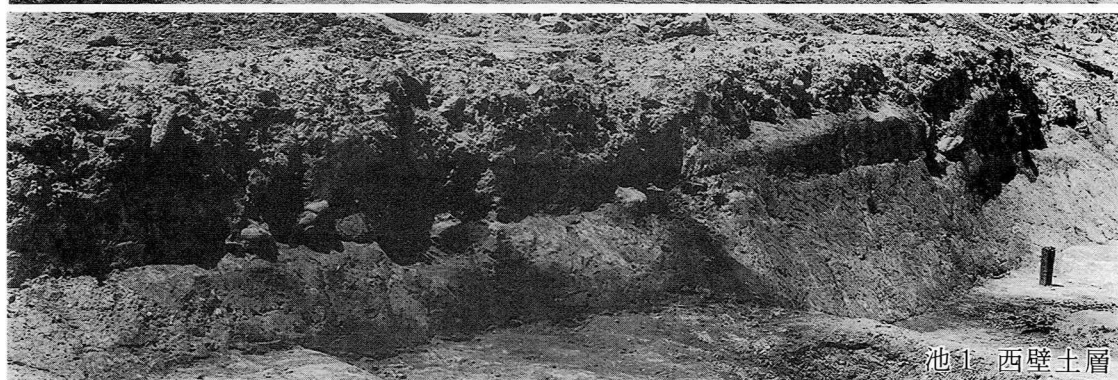
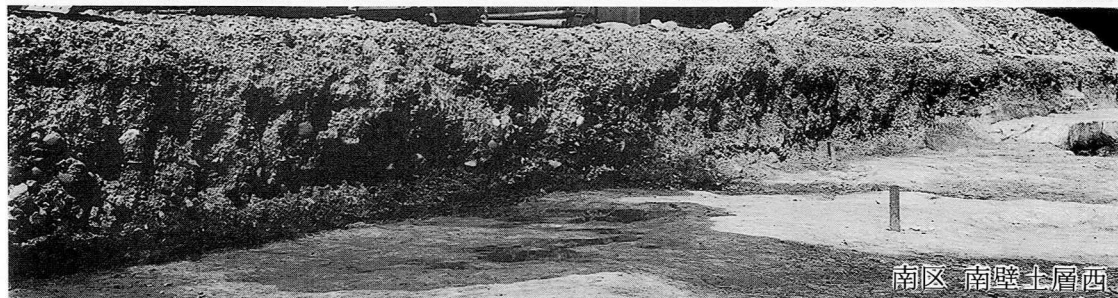
東区 暗渠

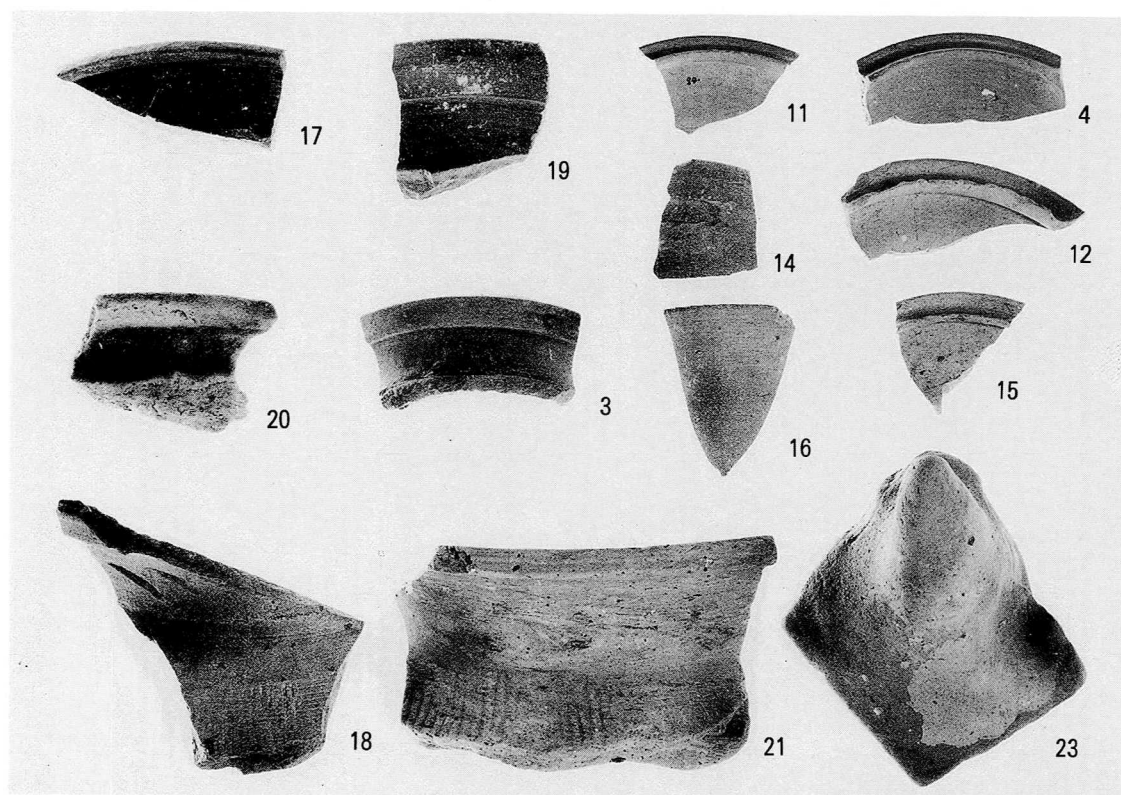
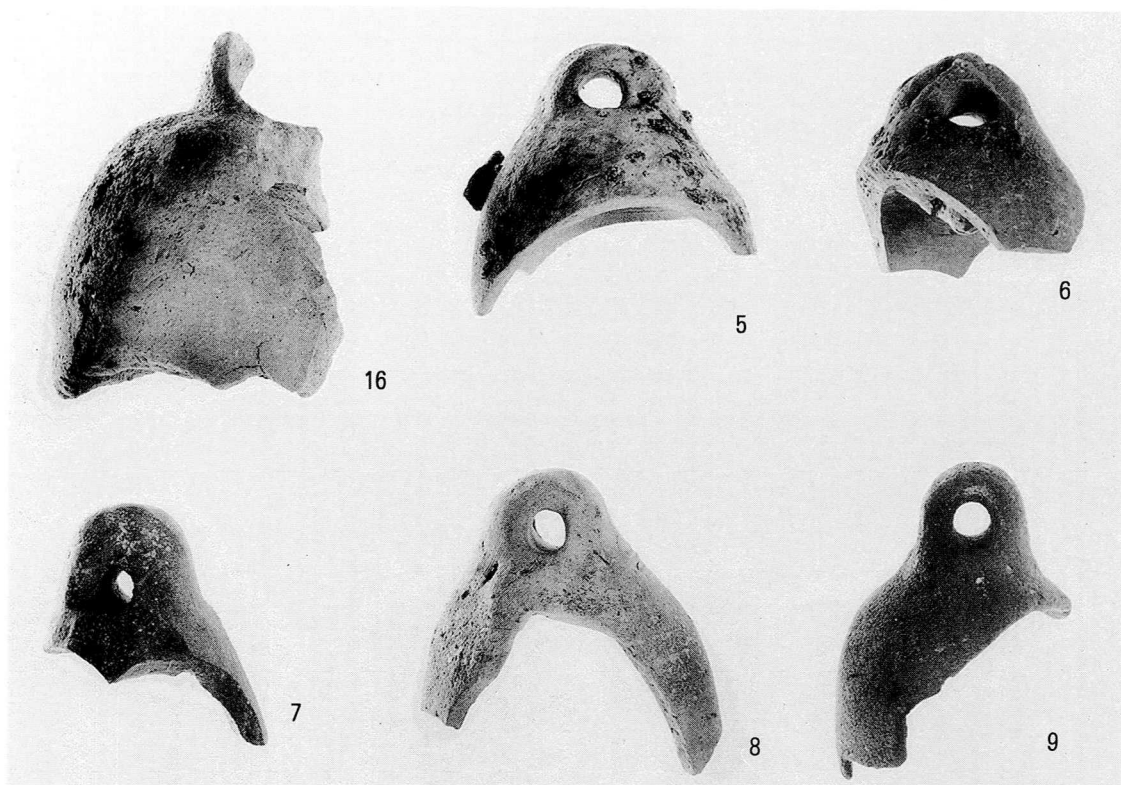


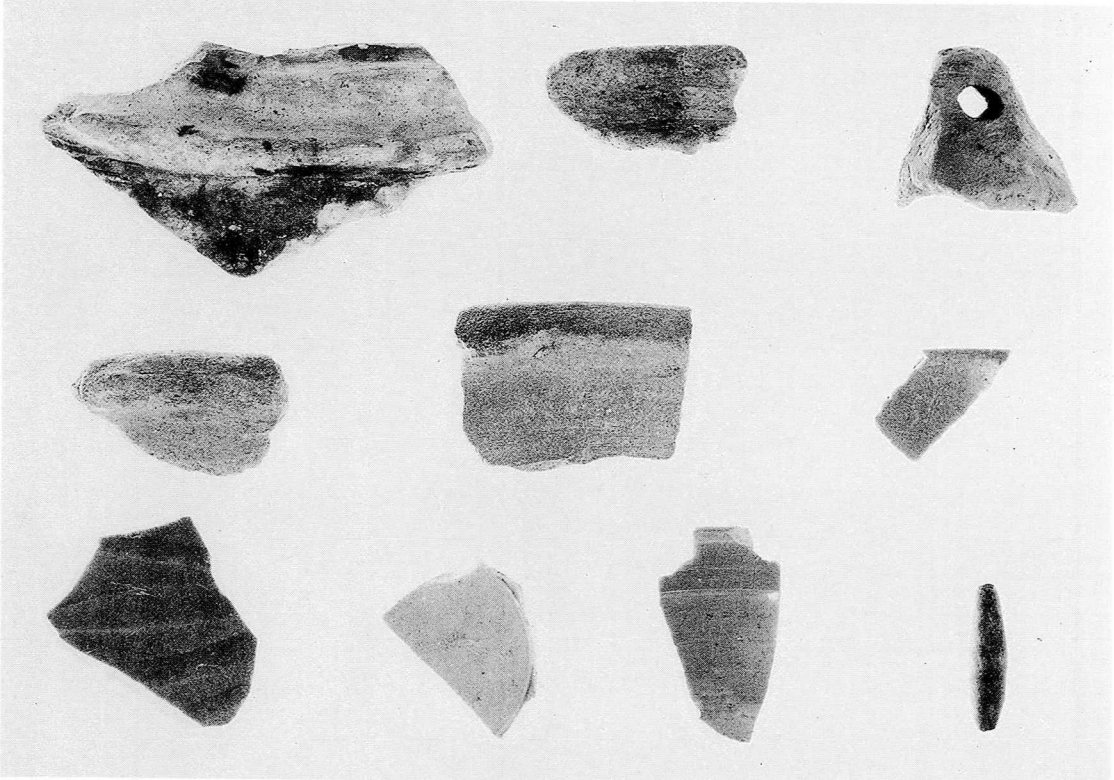
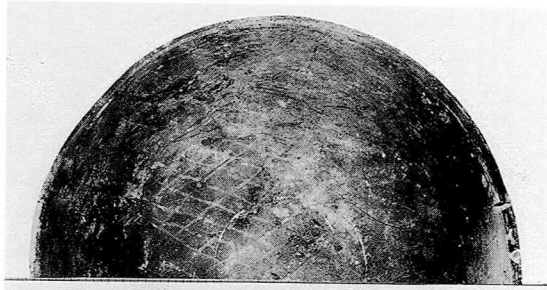
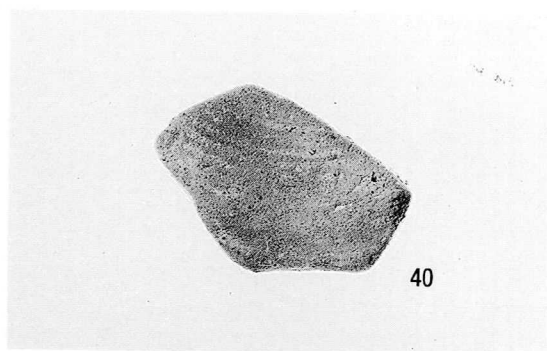
池2 遺物



西区 暗渠







ふりがな	くぼたいせき くぼたはいじ はくつちょうさがいよう
書名	窪田遺跡 窪田廃寺 発掘調査概要
副書名	
巻次	貝塚市埋蔵文化財調査報告 第31集
編著者名	坪之内 徹
編集機関	貝塚市教育委員会
所在地	〒597 TEL 大阪府貝塚市畠中1丁目17-1 (0734) 23-2151
発行年月日	1995年3月

所収遺跡	所在地	コード		北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
くぼたいせき 窪田遺跡	かいづかし 貝塚市						
窪田廃寺遺跡	くぼた 窪田	27208	51	59° 58 ～ 174° 050	1994.6. 1 ～ 1994.8.31	3916㎡	マンション 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
窪田遺跡 窪田廃寺遺跡	集落,寺院 遺跡	飛鳥時代 中世	溝 掘立柱建物	たこ壺 瓦器 土師器	飛鳥時代の遺構・遺物を検出した。		

貝塚市埋蔵文化財調査報告 第31集

窪田遺跡・窪田廃寺発掘調査概要

発行日 1995年3月

発行 貝塚市教育委員会  
大阪府貝塚市畠中1-17-1

印刷 (有)山村印刷所  
大阪府貝塚市近木1483-8